

斗

南

丘

(5)

遺

跡

斗南丘(5)遺跡

—国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

一〇一五・三一

2015年3月

青森県教育委員会

青
森
県
教
育
委
員
会

斗南丘(5)遺跡

—国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2015年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成25年度に国道279号むつ南バイパス道路改築事業予定地内に所在する斗南丘(5)遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、田名部低地につながる沢に面した段丘縁辺で、縄文時代中期末葉から後期初頭の竪穴住居跡を確認しました。これらは小規模ではありますが、周辺域での調査事例が少なく、地域の歴史を考えるうえで貴重な資料になるものと思います。

本報告書は、それらの調査成果をまとめたものです。今後埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成27年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 三上 盛一

例　　言

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成25年度に発掘調査を実施した、むつ市斗南丘(5)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、1,900m²である。
- 2 斗南丘(5)遺跡の所在地は、青森県むつ市大字田名部字斗南岡、青森県遺跡番号は208182である。
- 3 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した青森県が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成25年9月3日～同年10月30日
整理・報告書作成期間	平成26年4月1日～平成27年3月31日
- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は青森県埋蔵文化財調査センター畠山昇文化財保護主幹、浅田智晴文化財保護主査が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

石質鑑定	青森県立郷土館主任学芸主幹　島口天
遺物の写真撮影	フォトショップいなみ・有限会社無限
- 7 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 8 発掘調査及び整理・報告書作成に際し、下記の方々からご協力、ご指導を得た（敬称略、順不同）。森田賢司、坂本朋子、小山卓臣、奈良正義、山田清、高橋拓也
- 9 図1 遺跡位置図、及び図5 遺跡分布図に掲載した地形図は、国土地理院発行の「電子地形図25000(141.23~41.29-A3-y-20141124-050357-0000)」を用いている。
- 10 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 11 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 12 全体図等の縮尺は各挿図毎にスケール等を示した。
- 13 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は次のとおりである。S I－堅穴住居跡、S K－土坑、S N－焼土遺構、S P－柱穴
- 14 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 15 遺構実測図の縮尺は、原則として1/60に統一し、各挿図毎にスケールを示した。
- 16 基本層序の層序番号にはローマ数字を、遺構内堆積土の層序番号には算用数字を使用した。
- 17 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

	: 被然範囲		: ロームブロック		: 硬化面範囲
--	--------	--	-----------	--	---------
- 18 土層の色調表記等には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄)を使用した。
- 19 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、次のとおりである。P－土器　S－石器
- 20 遺物実測図には、挿図毎に1から通し番号を付した。

- 21 遺物実測図の縮尺は、原則として1/3に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
- 22 遺物写真には遺物実測図と共に番号を付した(例:図5-3は「5-3」と表記)。
- 23 遺物写真の縮尺は不同とした。

目 次

序	
例言	
目次	
挿図目次・表目次・写真図版目次	

第1章 調査概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	3
第2章 周辺環境	
第1節 遺跡周辺の地形及び 地質について	7
第2節 基本層序	9
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	9
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	13
(1) 堅穴住居跡	13
(2) 土坑	16
(3) 焼土遺構	19
(4) 柱穴	20
第2節 出土遺物	20
(1) 繩文土器	20
(2) 石器	28
第4章 総括	
第1節 遺跡の立地と検出遺構	29
第2節 出土遺物	33
引用・参考文献	35
遺構観察表	36
遺物観察表	37
写真図版	39
報告書抄録	47
奥付	

挿図目次

図 1 遺跡位置図	5
図 2 調査区位置図	6
図 3 段丘区分図	8
図 4 基本層序	9
図 5 遺跡分布図	10
図 6 遺構配置図	14
図 7 第1号竪穴住居跡	15
図 8 第2号竪穴住居跡	16
図 9 土坑－1	17
図10 土坑－2	18
図11 焼土遺構	20
図12 柱穴	21
図13 繩文土器－1	22
図14 繩文土器－2	23
図15 繩文土器－3	24
図16 繩文土器－4	25
図17 石器	27
図18 繩文土器時期別分布図	31
図19 繩文土器分類図	32

表目次

表 1 周辺遺跡一覧	11
表 2 竪穴住居跡観察表	36
表 3 土坑観察表	36
表 4 焼土遺構観察表	36
表 5 柱穴観察表	36
表 6 繩文土器観察表	37
表 7 石器観察表	38

写真図版目次

写真図版 1	39
上空から見た斗南丘(5)遺跡	
写真図版 2	40
調査区遠景、調査区から見た醸農(1)遺跡、 西側沢完掘、基本土層断面	
写真図版 3	41
第 1 号竪穴住居跡完掘・炉完掘・炉掘方完掘・断面	
写真図版 4	42
第 2 号竪穴住居跡完掘・炉断面・断面	
写真図版 5	43
第 1 号土坑断面・完掘、第 2 号土坑断面・完掘、 第 3 号土坑断面・完掘、第 4 号土坑断面・完掘	
写真図版 6	44
第 5 号土坑断面・完掘、第 6 号土坑断面・完掘、 第 1 号焼土遺構確認、第 2 号焼土遺構確認・断面、 第 1 号柱穴完掘、 作業風景	
写真図版 7	45
縄文土器	
写真図版 8	46
縄文土器・石器	

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過

一般国道279号むつ南バイパス道路改築事業に関する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成20年4月から、青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」と）と青森県土整備部道路課及び下北地域県民局地盤整備部道路施設課（以下「道路施設課」）により、継続的な協議及び現地踏査が行われた。当該事業予定地内の用地買収等の完了に伴って平成24年7月から青森県文化財保護課がむつ市斗南岡地内の試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、醜農（1）遺跡は範囲変更が行われ、醜農（3）遺跡隣接地は斗南丘（5）遺跡として新規登録が行われ、両遺跡ともに本発掘調査が必要であることが判断された（青森県教委2013）。

これを受け平成24年9月に、道路施設課と文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センターによる現地協議が行われ、平成25年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することになった。

また、本報告に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、下北地域県民局長から平成25年8月9日付け下県局整備第541号でなされ、これを受けて青森県教育委員会教育長から、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施を平成25年8月27日付け青教文第459号で通知されている。

（中嶋）

第2節 調査の方法

（1）発掘作業の方法

県文化財保護課の試掘調査の結果、縄文土器が出土したほか、堅穴建物跡とみられる遺構を検出した。このため、調査開始時は縄文時代の遺構検出に重点をおいた。

遺構測量点は、調査区周辺に打設済の幅杭（R165～R167）を使用した。基準点の座標値は道路施設課より提供を受けた。基準点からの測量に支障が生じた場合は、調査区内に設定した任意点に座標を移動し使用した。また、水準原点は3級基準点No.8（21.044m）を用い、幅杭及び調査区内の任意点に適宜水準移動を行った。

グリッドは、調査区を網羅するよう設定した。1グリッドは 4×4 mとし、原点は平面直角座標第X系のX=142900、Y=33600とした。南から北方向に向かってローマ数字（I～V）とアルファベット（A～Y）を組み合わせ、西から東方向に算用数字を付し、南西隅の組み合わせで呼称した。このため原点の呼称は I A-0 となる。

なお、測量基準点、水準点は平成22年以前に設置されており、使用した値は平成23年の東日本大震災による影響を受ける前のデータとなっている。本報告では混乱を避けるため、測量時のデータで提示している。国土地理院のPatchJGD Ver. 1.0.1(補正パラメータファイル:touhokutaiheiyouki2011.par)を用いて変動後の原点座標値を求める、X=142899.6375、Y=33600.2233となる。また国土地理院のPatchJGD(標準版) Ver. 1.0.1(補正パラメータファイル:touhoku2010_h.par)及びtouhokutaiheiyouki2011_h.par)を用いて水準原点の変動後の標高値を求める、20.820mとなる。

遺跡の基本層序は、地表面から順に層序番号をⅠ層、Ⅱ層とローマ数字で付した。付寸際は試掘調

査の結果を基にしたが、一部変更を加えた。

試掘調査において、I層にあたる表土及び盛土は遺物が希薄であると判明したため、掘削時に重機を併用して省力化を図った。出土した遺物は、適宜グリッドと層位を基準に取り上げた。

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付して精査した。遺構内堆積土観察用のセクションベルトは、遺構の形態・大きさ等に応じて、基本的に4分割又は2分割で設定した。遺構内堆積土には、層序番号を確認面から順に算用数字で付し、ローマ数字を付した基本層序と区別した。

遺構の実測と遺物の出土位置は、ソキア製トータルステーションによる測量点を元に、株式会社Cubic製「遺構実測支援システム」を用いて作図した。実測図は縮尺1/20を基本として作成し、遺構規模や性格に応じて縮尺を変更した。出土遺物は、遺構単位で層位を基準に取り上げることを基本とし、必要に応じて形状実測図等を作成した。実測に際しては造り方測量を併用した。

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1790万画素数のデジタルカメラを併用し、遺構検出状況、遺物出土状況、発掘作業状況等について記録した。

(2) 整理・報告書作成作業の方法

斗南丘(5)遺跡は、縄文時代の堅穴住居跡2軒、土坑6基、焼土遺構2基、柱穴1基を検出し、遺物は土器や石器が段ボール箱に換算して5箱出土した。整理・報告書作成作業は、検出された遺構の構築時期や性格等の検討をしながら進めた。

トータルステーションによる測量で作成した図面は、パソコン上で確認作業及び図面調整を行った。造り方測量で実測した図面は調整後スキャナーでデジタル画像化し、トータルステーションで作図したものと合成した。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータはタイトルを入力し、日付毎と内容毎に整理した。

遺物の注記は調査年度、遺跡名、遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては出土地点・層位等の整理を怠らないようにした。

遺物の選別は遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。選別資料は慎重に観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

写真撮影は業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。また、石器の石材产地を同定するため、石質鑑定を専門家に委託して行った。

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、株式会社Cubic製「遺構実測支援システム」を使用した。実測図版・写真図版等の版下作成はアドビシステムズ製「Illustrator」、「Photoshop」をそれぞれ使用した。また、割付作業はアドビシステムズ製「InDesign」を使用した。

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆司（現青森県立郷土館館長）

次長（総務GM）高橋 雅人

調査第一GM 中嶋 友文

文化財保護主幹 畠山 昇 神 康夫（発掘調査担当者）

文化財保護主査 平山 明寿 浅田 智晴（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員 葛西 勲 前青森短期大学教授（考古学）

〃 上條 信彦 国立大学法人弘前大学人文学部准教授（考古学）

〃 島口 天 青森県立郷土館主任学芸主査（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

8月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

9月3日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備を行った後、表土除去を開始した。

9月上旬 基本層序及び遺構確認面を試掘トレンチと新規トレンチで追認し、重機による表土除去の判断基準とした。

9月中旬 重機を用いて表土除去を行った。

9月27日 島口調査員から地形・地質に関する現地指導を受けた。

10月上旬 酪農(1)遺跡の調査開始に伴い、発掘作業員の増員を行った。

10月中旬 職員2名が新たに増員され、斗南丘(5)遺跡の作業効率が改善した。

10月22日 予定調査範囲(1,900m²)の調査を終了し、酪農(1)遺跡の調査へと移行した。

10月30日 調査器材の撤収を行い、全ての工程を終了した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

平成25年度に実施した発掘調査に関する報告書刊行事業は、平成26年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成25年12月に終了した。この他の整理作業・報告書作成作業は平成26年4月から平成27年3月まで行った。主体となる時期は縄文時代であるため、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 三上 盛一

次長（総務GM）高橋 雅人

調査第一GM 中嶋 友文

文化財保護主幹 畠山 昇（発掘調査担当者）

文化財保護主査 浅田 智晴（発掘調査担当者）

本報告書に関する整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

平成25年12月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行い、写真類の整理作業は終了した。

平成26年4月 発掘作業で作成した図面類の整理作業を行った。遺物は数量や重量計測後、溝文土器から順次接合・復元作業を進めた。石器は報告書掲載遺物を選別した。

5月上旬 土器類の接合・復元作業が終了したので報告書掲載遺物の選別作業を行った。引き続き選別した遺物の拓本、実測作業を開始した。

10月中旬 図化作業の終了した遺物から順次トレースを開始した。

11月上旬 トレースが終了した図版から順次組版作業を開始した。

12月上旬 報告書掲載遺物(石器)の写真撮影をフォトショップいなみに委託した。調査成果を総合的に検討し、報告書の原稿作成を開始した。

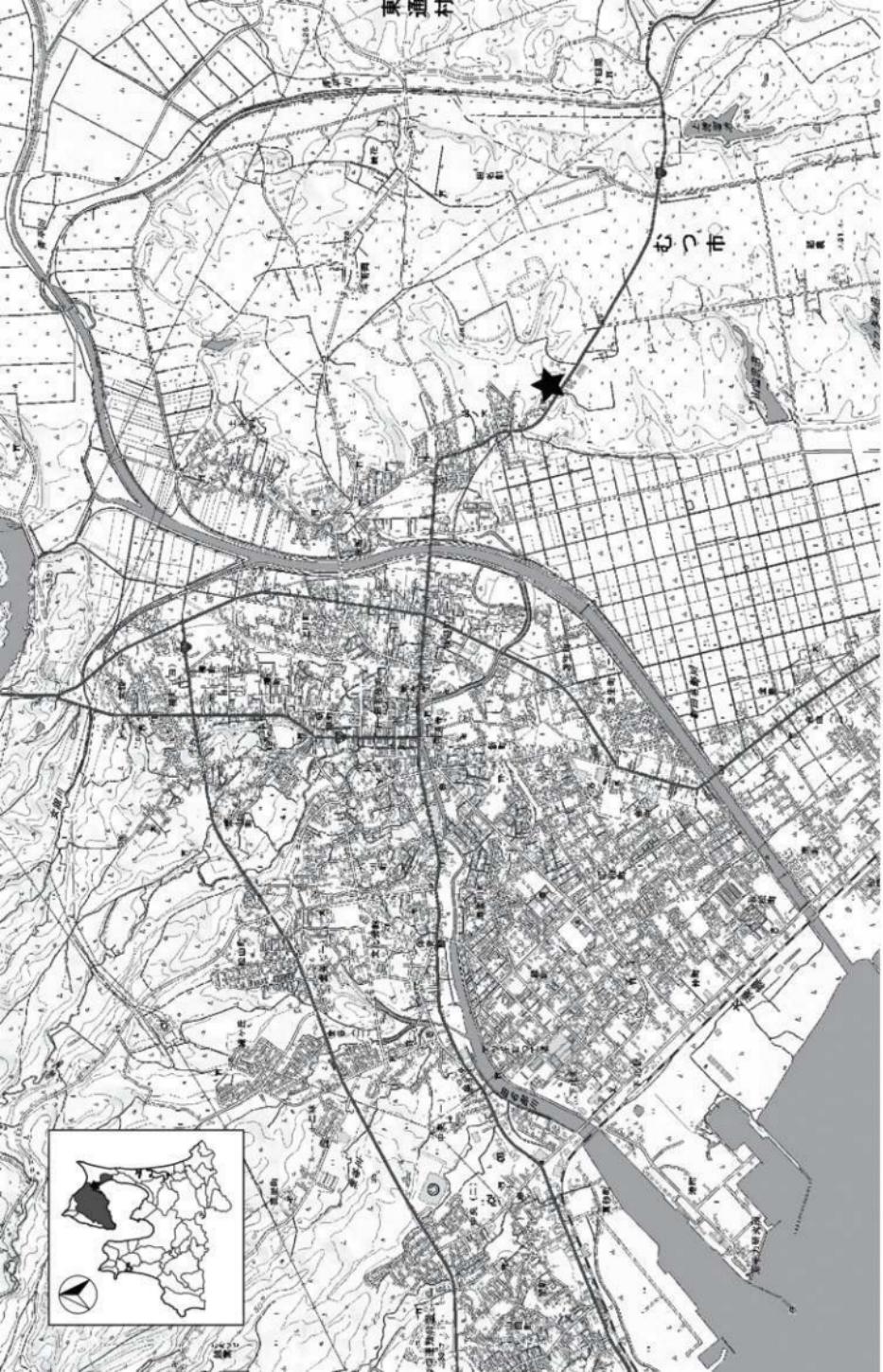
12月中旬 報告書掲載遺物(土器)の写真撮影を有限会社無限に委託した。また、島口調査員に石質鑑定を依頼した。

1月下旬 原稿・版下が揃ったので、報告書の編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3月31日 3回の校正を経て報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納した。

(浅田)

図一
遺跡位置図



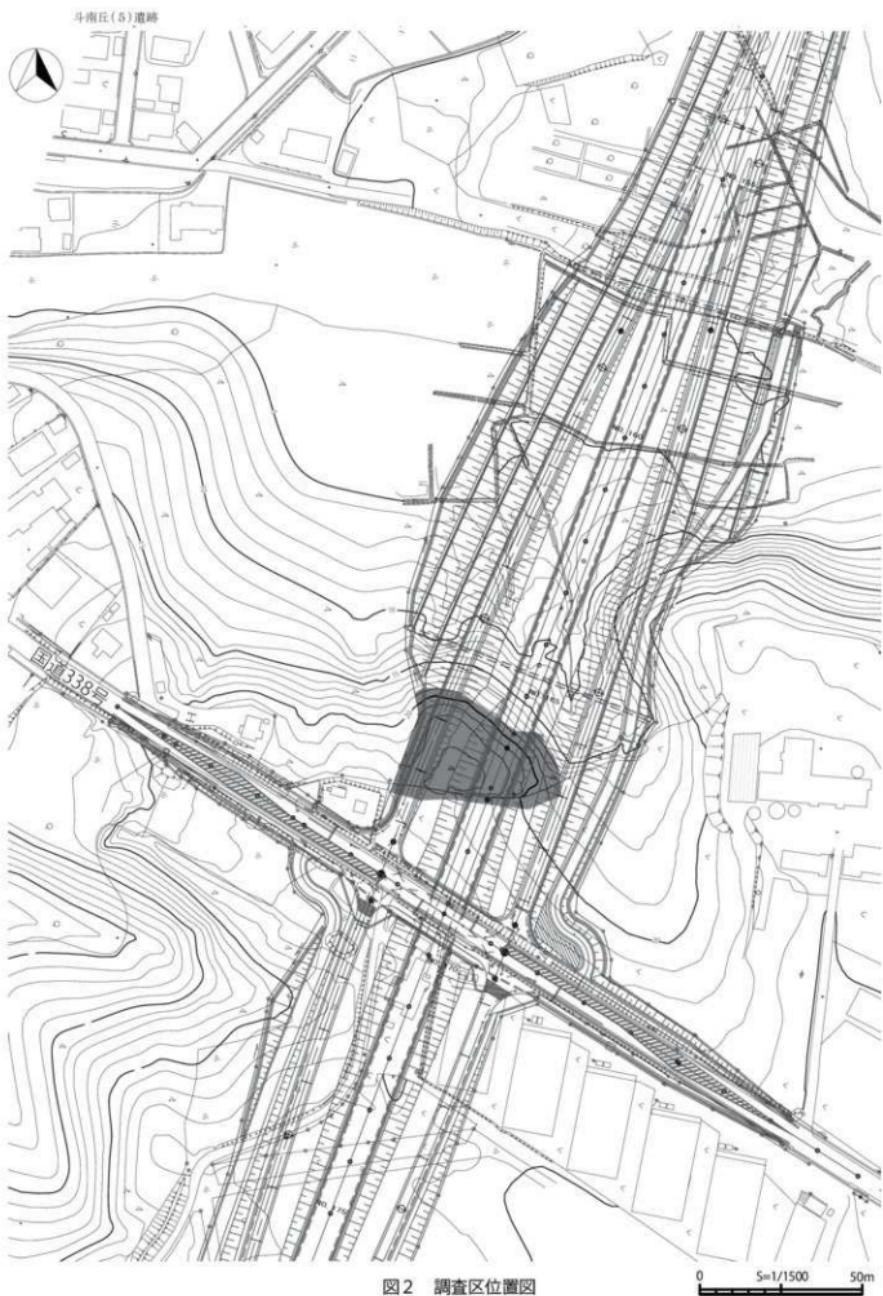


図2 調査区位置図

第2章 周辺環境

第1節 遺跡周辺の地形及び地質について

青森県立郷土館 島口 天

1 周辺の地形・地質

斗南丘(5)遺跡は、田名部低地の東側に分布する海成段丘上に位置し、その標高は約25mである。田名部低地について川村(2001)を引用し、海成段丘について桑原(2005)を引用して述べる。

田名部低地は、下北半島のほぼ中央部にある同半島で最も広い沖積低地で、標高5m以下の平坦な地域が多く、河川の自由曲流が著しい。西は恐山火山地、東は砂子又丘陵、北は下北台地に取り囲まれるように南に向いて分布している。中央を田名部川が流れている。むつ市田名部付近から田名部川に沿って続く三角州平野と谷底平野、さらに支流の目名川と青平川によってつくられた谷底平野および田名部川の河口付近から陸奥湾岸に沿って南東にのびる砂州や砂州背後の後背湿地からなる低地などによって構成されている。

田名部低地周辺の海成段丘は、テフラとの層位関係や比高5~15mほどの段丘崖の存在に基づいて、高い段丘(古い段丘)から順に高位面、蒲野沢面、東栄面、樺山面、斗南ヶ丘面、美付川面、および目名川面の7面に区分される(図3)。斗南丘(5)遺跡は、斗南ヶ丘面上に立地する。

斗南ヶ丘面は、中央部の標高15~40mの地域に分布する。東栄面と樺山面とに挟まる地域に、津軽海峡および陸奥湾双方から湾入するように分布する。東西3~10km、南北10~12kmの地域の大部分を占め、本地域に分布する段丘群の中で最も広く発達する。尾根状を呈している部分はほとんどない。最大海進時の旧汀線を示唆する背後の傾斜変換点の海成層の上限高度は、約30mである。

段丘構成物である斗南ヶ丘層は、模式地の東通村早掛平で厚さ12m以上の堆積物である。ここでは、明瞭かつ平滑な波浪侵食面が本層上限から約3m下にあり、この侵食面を境として本層を上部と下部とに二分できる。この地層は、北海道洞爺カルデラ起源の洞爺テフラ(約11.5万年前)以上のテフラに、層厚0.3mほどのローム層を挟んで覆われる。このことから、斗南ヶ丘面は酸素同位体ステージ5e(約12.7~12.2万年前)の高海面期に形成されたと考えられる。

斗南ヶ丘層下部は、模式地では層厚9m以上の泥層として露出する。恐山火山を起源とする田名部Cテフラ中の1つの火碎流ユニット(正津川)を下刻する幅200m、深さ7m以上の谷を埋積する。露頭最下部でやや砂質となる。また、内湾棲のマガキといった貝殻片や木片、および堅果を含む。

斗南ヶ丘層上部は、模式地では層厚3mほどの砂層で、平滑な波浪侵食面上を直接に覆って段丘をなす。下部~中部は無層理な細粒砂で、淘汰はよい。一方、中部と上部との漸移部には中礫が多量に含まれ、水平層理も発達する。最上部には根痕が見られる場合もある。模式地以外では、中部には外浜上部の指標であるトラフ状斜交層理(幅1m、セット高20cm前後)が、上部には前浜の指標である低角のくさび状の斜交層理が発達する。加えて中部と上部との漸移部には、前浜の堆積環境の示相化石として広く知られる生痕化石の密集層が認められる。

2 遺跡内の地質

表土である黒～黒褐色土の下位に薄い褐色砂質ローム層が見られ、やや粘性がある。この層内に洞爺テフラの挟在は確認できなかった。砂質ローム層の下位には淡褐色細～中粒砂層が見られ、砂粒の円磨度は低く、粘土質で淘汰不良である。さらにその下位には、淘汰良好で砂粒の円磨度がやや高い中粒砂層が見られ、石英や長石の割合が高く、乾燥すると白っぽくなる。全体的に木の根の跡と思われる搅乱が著しく、各層の境界の判別は難しい。砂層は斗南ヶ丘層最上部に相当すると考えられる。

引用文献

- 川村 正(2001) I章 大地の風貌 5.5 下北低地。青森県史 自然編 地学、青森県史編さん自然部会編集、青森県、p. 99-102。
- 桑原拓一郎(2005) 下北半島田名部平野における海成段丘構成物の形成と相対的海面変化。第四紀研究、44(3)、p. 131-144。
- 桑原拓一郎・山崎晴雄(2001) テフラから見た最近45万年間の恐山火山の噴火活動史。火山、46、p. 37-52。

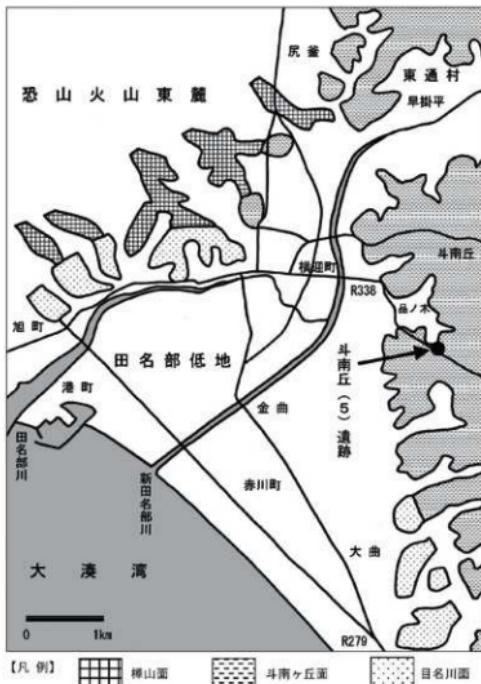


図3 段丘区分図 [桑原・山崎(2001)を元に作成]

第2節 基本層序

本調査における基本層序は、調査区南側に設定した土層断面を基に設定した。青森県文化財保護課による試掘結果を踏まえ、図4のように基本層序を設定した。

I層は表土にあたる。現表土のI a層は草木痕による影響を多分に受けしており、厚さ30cmでほぼ調査区全面を覆っていた。また、部分的にI b層が20cm程の厚さで堆積していた。堆地状態の部分に堆積しており、調査時は漸移層との認識を持っていたが、下層のII層が影響を受けた所に堆積していることから、II層堆積後に起きた土地改変の痕跡である可能性がある。

II層は褐色の粘土質シルトで、縄文時代の遺物包含層となっている。段丘上では約10cm程の厚さしかないが、斜面地ではやや厚く堆積していた。遺構堆積土の母材にもなっており、下層のIII層と色調の際が少なく、混入物の状況により判断することが多かった。

III層はローム主体となる。III層は黄褐色の粘土で、本層の上面を最終的な遺構確認面としている。上述したように乾燥すると色調が淡く変化し、遺構堆積土との差異が少なくなるため、遺構検出が非常に識別が困難な状況であった。

IV層はローム主体の層でIII層と同様であるが、やや明るい色調となる。

V層は浅黄橙色の粘土質シルトで漸移層と判断した。

VI層以下は灰白色の砂層で、前節に述べられている斗南ヶ丘層最上部にあたる。遺構堆積土に混入している砂は、本層が母材となっている。

(浅田)



図4 基本層序

第3節 遺跡周辺の歴史的環境

斗南丘(5)遺跡の調査区周辺は、調査以前の土地改変により既に削平されており、調査区が周囲より一段高い状況であった。このため詳細な遺跡の範囲を確認することはできない。国道338号を挟んだ調査区南側の確認調査は、齶農(3)遺跡隣接地として行われている。調査の結果、削平による影響を受けていたため、遺構・遺物とも確認できなかった(県教委2014)。これは本調査区南側の状況と類似しており、過去の状況を伺うことはできない。しかし周辺住民の方で、既に削平されている地点から、以前削平される前に遺物の出土があったことを記憶している方がおり、調査区周辺の段丘上にも遺構が展開していた可能性がある。本調査の成果と合わせ、縄文時代の遺構は段丘を開析する谷に沿って展開していたものと推測できる。



図5 遺跡分布図

表1 周辺遺跡一覧

むつ市

遺跡番号	遺 跡 名	時 代	備 考
208030	土手内遺跡	縄文(前・後)、平安	
208043	斗南丘(1)遺跡	縄文(後)、平安	
208044	斗南丘(2)遺跡	縄文(後)	
208045	斗南丘(3)遺跡	縄文(中)、平安	
208046	斗南丘(4)遺跡	平安	
208047	酪農(1)遺跡	縄文(後)、平安	平成26年度県教委調査
208048	酪農(3)遺跡	縄文(後)	
208049	酪農(5)遺跡	縄文(前・後)	
208052	最花遺跡	縄文(早・前・中)、平安	橘・奈良他 1978・1983・ 1984・1985・1986、 最花貝塚遺跡緊急発掘 調査団 1981、森田 2013
208054	第一田名部小学校校庭遺跡	縄文(中)、平安	
208056	田名部館遺跡	中世、近世	県教委 1997
208062	女館貝塚	縄文(前)	
208065	品ノ木遺跡	縄文(前)、平安	
208075	上道遺跡	縄文(後)	市教委 1981
208182	斗南丘(5)遺跡	縄文(後)	本報告
208183	内田遺跡	縄文(後)、平安	

東通村

遺跡番号	遺 跡 名	時 代	備 考
424033	大館遺跡	平安、中世	
424034	上流(1)遺跡	縄文(後)	
424047	下田屋(1)遺跡	縄文(後)	
424137	上流(2)遺跡	縄文(後)	

本遺跡の位置する海成段丘では、主に縄文時代後期と平安時代の遺跡が確認されている。斗南丘(5)遺跡周辺の遺跡登録範囲を報告書刊行時の遺跡地図を基に作成したものが図5と表1である。なお、図5内の破線はむつ南バイパス建設予定範囲を示している。以下に過去発掘調査が行われた遺跡の成果を中心に記載する。

酪農(1)遺跡 [208047] は本遺跡から約300m北側に位置する。周辺は土砂採掘に伴う削平を大きく受けているが、平成25・26年に青森県埋蔵文化財調査センターが遺跡西縁部の調査を行った。調査区西側は段丘を開析する谷に面し、斗南丘(5)遺跡の北側に位置する谷と合流した先で田名部低地とながっている。縄文時代後期の集落跡や縄文時代早期から晩期までの包含層を確認した。また古代の製炭施設である製炭土坑を検出した。

酪農(1)遺跡の北東約1kmには、最花遺跡 [208052] が存在する。これまで最花貝塚と最花南遺跡として登録されていたが、県道6号線により分断されているだけで本来一つの遺跡であり、名称と範囲の変更がなされている。縄文時代中期後葉の土器型式である最花式の標式遺跡であるが、最花貝塚

とされていた北側では、縄文時代早期中葉～末葉・前期末葉・中期前葉～末葉・後期初頭～前葉の土器・石器・骨角器が出土している（金子・牛沢・橋・奈良 1978、最花貝塚遺跡緊急発掘調査団 1981、金子・橋・奈良 1983、むつ市教委 1986）。最花南遺跡としていた地点では縄文時代早期中葉・中期末葉・平安時代・中世の土器・陶器・古銭等が出土している。遺構としては平安時代の堅穴住居跡を検出している（橋・奈良 1984、橋・奈良・星 1985）。堅穴住居跡としては1軒のみの検出だが、カマドと床面を白頭山 - 苦小牧火山灰が覆っており、炭化材が多量に出土した焼失家屋である。床面上からは土師器・須恵器・鉄製品・炭化種実が出土している。

上道遺跡 [208075] は醸農(1)遺跡の北西約300mに位置する。昭和54年に土砂採掘に伴う緊急発掘が行われた。調査区南側の露頭断面にプラスコ状土坑が確認されているほか、縄文時代前期末葉と後期初頭～前葉を中心とする遺物が出土している（むつ市教委1981・成田2011）。なお、上道遺跡東側で土取による削平を受けた地点から、削平時に縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・鉄製品を採集されている地元の方がおり、上道遺跡南側に存在する谷に沿って周辺域にも遺跡が存在していたことが窺える。

実際の発掘調査事例は少ないものの、図5や表1の状況から、遺跡の立地は海成段丘を開析する谷に面している事例が多いと読み取れる。上述した遺跡はいざれも開析谷に面している共通点を持つ。基盤層が砂層で水はけの良い段丘であることから、遺跡内での活動に際し、水の確保が立地に影響しているものと思われる。

(浅田)

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

(1) 壊穴住居跡[SI] (図7～8)

壊穴住居跡は、調査区東側で2軒検出した。以下、検出順に詳細を記載する。

第1号壊穴住居跡 [SI01](図7)

位置と確認 調査区東端のIU・IV-21・22グリッドに位置している。前年度の確認調査で「地床炉を持つ壊穴建物跡」との報告がなされていた部分にあたる。今回の調査では埋め戻されていた試掘トレンチを拡張する形で進めたところ、壊穴住居跡と土坑、焼土遺構が重複していることを確認した。このため第1号壊穴住居跡、第6号土坑、第2号焼土遺構と各遺構に名を付した。

重複関係 上記の遺構の新旧関係は、古い順から、第6号土坑→第2号焼土遺構→第1号壊穴住居跡で、本遺構が最も新しい。

規模・平面形 長軸402cm×短軸363cmのほぼ円形を呈するものと思われる。南側の一部を除き壁が検出できなかったが、図17-3の石皿が床面直上層より出土したことから、これを囲む範囲として図示している。

堆積土 9層に分層できた。9層は掘方埋土で、褐色砂やIV層が斑状に混入しており、掘り返された土で埋め戻された状況を示している。8層は炉床にあたり、やや硬化しているが明確な被熱色ではない。5～7層は南側から徐々に床面上に堆積していく様相が見て取れることから、斜面上方より流入した土により埋没していたと判断できる。4層の色調は、炉周辺では黒色が強いが、壁近くは褐色が強くなる。このことは、炉の周辺に炭化物が多く残存していたことで、混入の度合いに差異が生じたためと考えられる。3層は西側から中央にかけて厚く堆積しており、3層の堆積終了時点では深い窪地の状態になっていたと推測する。さらに1・2層が窪地に流入したことによって窪地の埋没が完了している。

壁面・床面 緩斜面に位置しているため北側は斜面によって、南西側は確認調査時のトレンチに削平されたため壁面は確認できなかった。確認できたのは北西壁の一部と南東壁の一部分である。床面からやや開きながら立ち上がり、確認できた比高差は最大61cmである。確認できた床面は全体の1/4程度である。若干南側が高くなっているものの、おおむね平坦である。また地床炉の付近では硬化面の広がりを確認した。

柱穴・土坑 確認できなかった。

炉 床面の中央からやや東よりの場所に石囲炉と地床炉を検出した。石囲炉は2個の炉石がL字状に埋置されていたものであるが、炉石を埋設したと考えられる溝状の掘方が被熱面を取り囲むように伸びることから、本来は長方形の石囲炉であったと思われる。この石囲炉に隣接して東側で検出した地床炉は、おおむね壊穴住居跡の中軸線上に位置する。また炉の周辺では踏みしめられ硬化した床面を検出している。搅乱が激しいため明確に捉えることはできなかったが、配置の様相から複式炉の可能性が考えられる。

25 Y=33700

20 Y=33680

15 Y=33660

10 Y=33640



|| A X=143000

|| U X=142980

0 10m
S=1/300

基本土層断面

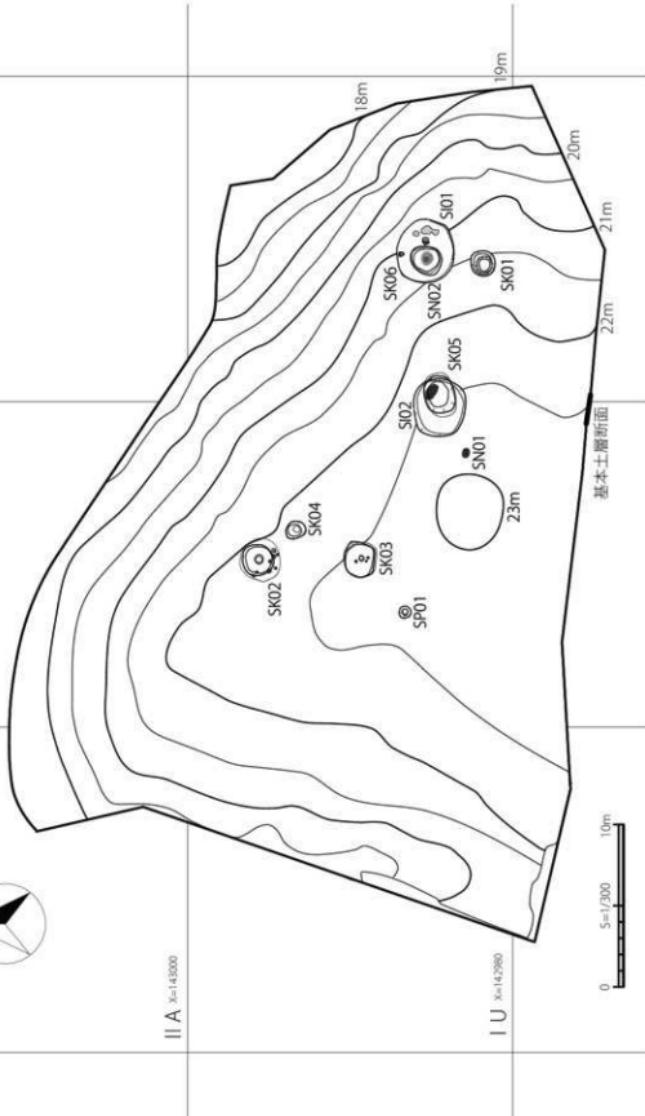


図 6 遺構配図図

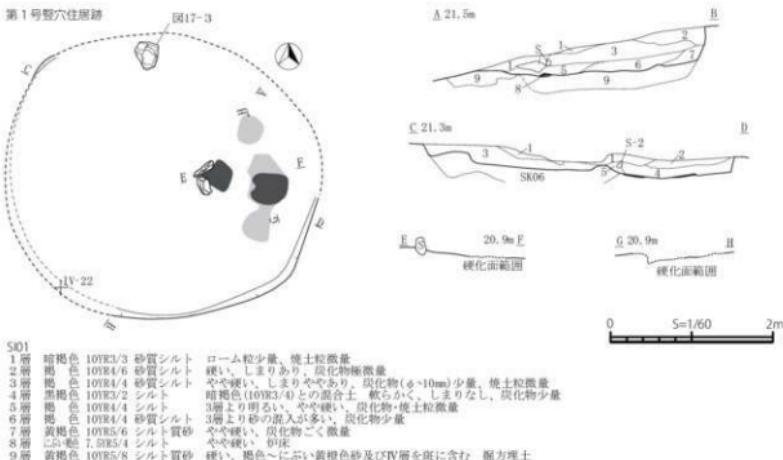


図7 第1号竪穴住居跡

出土遺物 繩文土器は98点、2038.5g出土した。床面からの出土は無く、いずれも堆積土や確認面からの出土である。繩文時代中期末葉の大木10式併行土器が主体となる。石器は不定形石器や石皿が見られる。

小結 出土土器及び炉の構造から繩文時代中期末葉頃に機能していたと思われる。

(畠山)

第2号竪穴住居跡 [SI02](図8)

位置と確認 IU・IV-19・20グリッドに位置する。表土除去後に行った遺構確認の際には明確な遺構プランを確認することができなかった。このためIV-20グリッド部分を先行して掘り下げていた際、後に地床炉と判明する焼土範囲を検出した。このため慎重に周辺を確認したところ、炭化物粒の混入が周囲よりも僅かに多く混入する堆積土範囲を捉えることができた。焼土範囲周辺には黒褐色～暗褐色土が拡がり、硬化面も確認できなかった。このため本遺構東側の範囲確定は困難であったが、最終的に後述する土坑との重複が確認できた。

重複関係 第5号土坑とほぼ同位置で重複し、本遺構が新しい。地床炉は第5号土坑堆積土が焼け込んでいる。

規模・平面形 IV-20グリッドに位置する北東側は、遺構確認の際に掘り下げてしまっているため情報が欠落しているが、長軸363cm×短軸328cmの不整円形を呈するものと思われる。

堆積土 住居廃絶後の堆積土は3層に分層できた。3層は自然流入土で、竪穴住居跡の南側を中心に堆積しており、2層もその上位を覆うように堆積している。色調がいずれもにぶい黄褐色で、母材にロームを含んでいるものと考える。このことから竪穴住居跡の周囲に掘り上げ土のような、ロームを

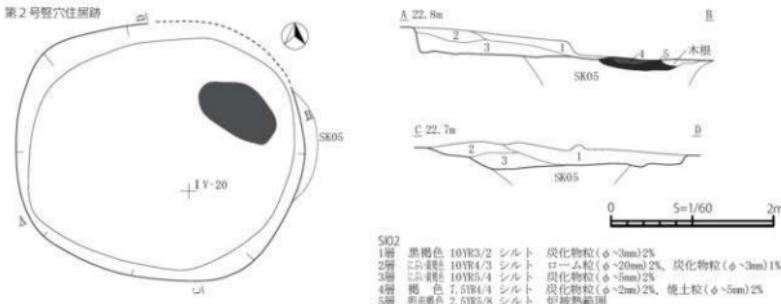


図8 第2号堅穴住居跡

含む土が積まれていた可能性がある。1層は自然流入の黒褐色土で、残りの窪地を覆い尽くしている。壁面・床面 南西側を中心に壁面を検出した。床面と確認面の比高差は最大22cmを測る。西側は床面からほぼ垂直に立ち上がっているが、南側はなだらかに開いている。床面は第5号土坑と重複している部分はやや凹凸があるものの、全体としては概ね平坦である。

柱穴・土坑 検出できなかった。

炉 北東寄りの床面で地床炉を1基検出した。当初、4層を炉床と判断しており、図の範囲は4層の範囲となっている。第5号土坑調査の際に炉を断削った際、4層の下部に強い被熱面が存在することを確認した。このため5層が炉床で、4層はその上部を覆う焼土混合層であると判明した。

出土遺物 床面及び堆積土から繩文土器が41点、330.4g出土した。出土層位は1層が34点、275gと大半を占めている。床面と1層が接合した粗製深鉢が1点出土している(図14-7)。また第1号堅穴住居跡と遺構間接合したものは1層から出土している(図14-5)。時期比定可能な特徴を持つもののが少ないものの、焼成や胎土等から繩文時代後期初頭に分類できるもので占められており、明確な繩文時代中期末葉の特徴を持つ土器は出土していない。

小結 出土土器の様相から繩文時代後期初頭頃に機能していたものと推測する。

(浅田)

(2) 土坑[SK](図9~10)

6基検出した。平面形状や断面形状で以下の様に分類した。

I類：平面形は隅丸方形、断面形はフラスコ形を呈する。

II類：平面形は楕円形、断面形は半円形を呈する。

本調査区で主体を占めるのはI類で、第1・2・3・5・6号土坑が該当する。平面分布を見ると北東側斜面に面した段丘縁辺部に散在する。第5号は第2号堅穴住居跡と、第6号は第1号堅穴住居跡と重複し、いずれも土坑が古い。また第2号焼土構造は第6号土坑の堆積土最上層の被熱痕跡であるため、第6号土坑より新しいことがわかる。断面形はフラスコ形を呈するが、開口部の規模と底面規模が大きく異なるものと、あまり差異が無いものが見られる。これは開口部付近の崩落の度合が遺

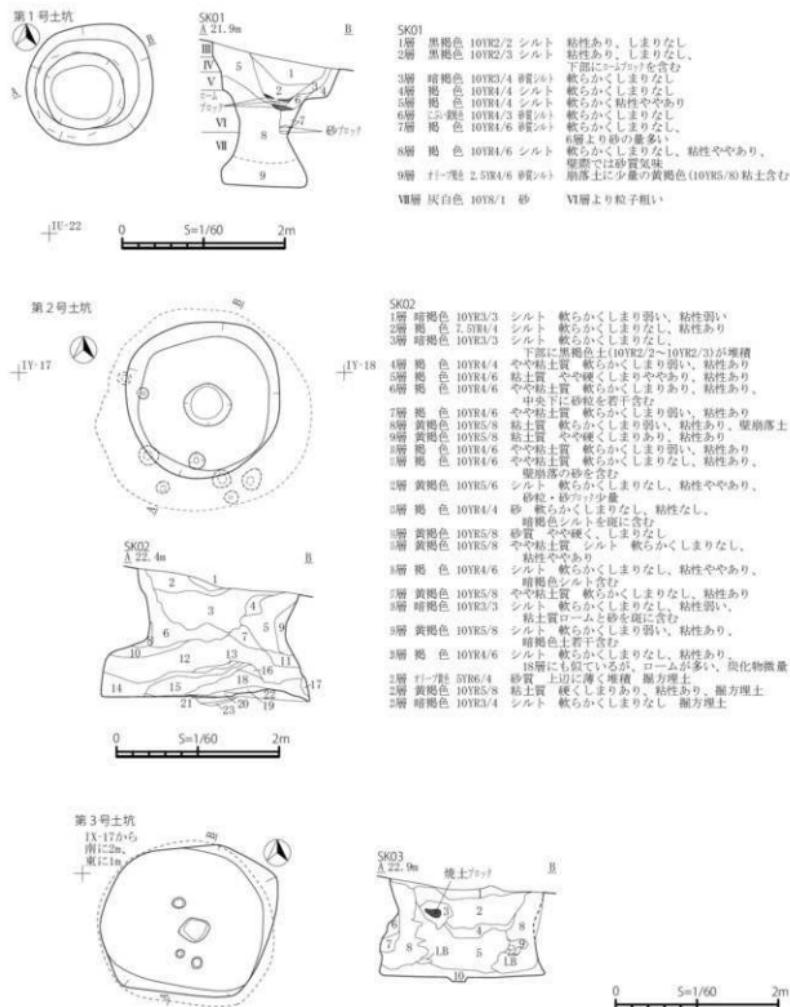


図9 十抗-1

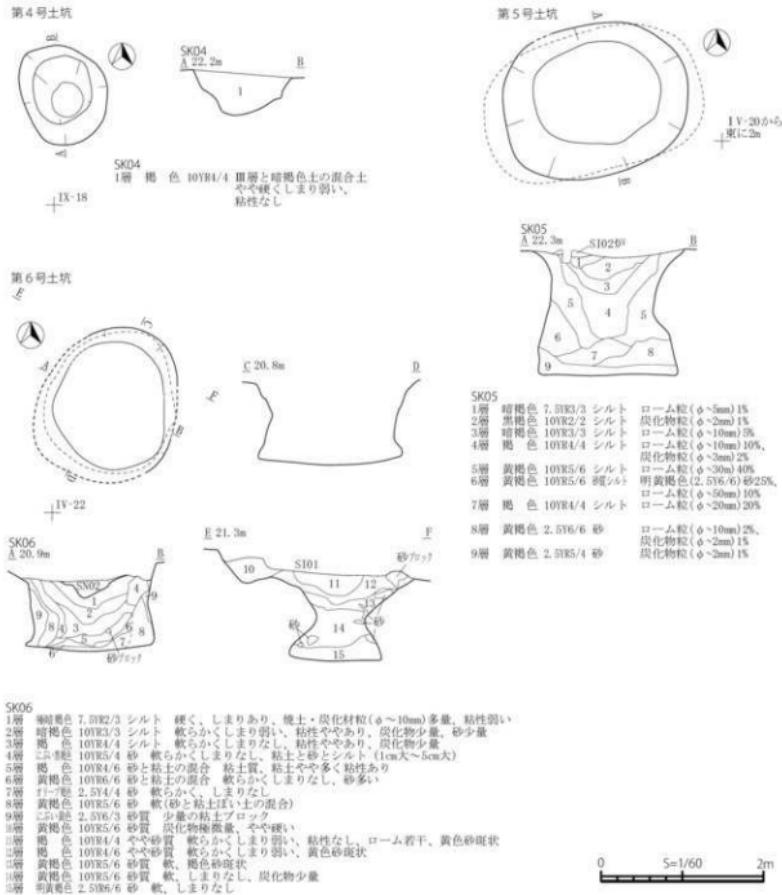


図10 土坑-2

構毎に異なるためと考えられる。開口部径は第1号が長軸162cmと小ぶりだが、他は最大の第5号で235cmを測る。底面はいずれも概ね水平である。第2号は掘方埋土で底面を整えていることが窺える。第3号にも底面に掘方と思われる掘り込みが確認できるが、こちらは埋め戻されておらず、機能時に凹凸が存在した時期があるものと思われる。基本的な埋没過程は、廃絶直後より壁面崩落土と開口部から流入する自然流入土が互層となったり、混合したりしながら、上部まで徐々に埋まっている。全て掘り込みが1mを超えており、VI層まで到達しているため、壁面崩落に伴い堆積土に砂が混入するものが多い。窪地状態となる最上部は自然流入による暗褐色～黒褐色土が主体となる。この中で様相が異なるのは第3号で、堆積土中央で確認された、ローム粒や焼土粒を均一で多量に含む5層や3層は、短期間に埋め戻された人為堆積の様相を示している。また堆積土に砂を混入する層が無く、ロームが母材になっているものが多いことも、壁の崩落前に埋没したことを見ていると考えられる。

出土遺物はいずれも少なく、第1号から5点、84.3g、第3号から2点、34.6g、第6号で3点、36.2g出土した。第1号土坑と第1号竪穴住居跡と遺構間接合しているが、出土層位は堆積土であるため流入した堆積土に混入したものと考えられる。その他も堆積土内からの出土であり、埋没過程で混入したものと推測する。

II類は第4号土坑が該当する。第2号土坑の南東側で単独検出した。I類と比較すると平面規模や深さが小型である点、堆積土が褐色土の単層で、掘り上げ土で埋め戻された可能性がある点で大きく異なる。出土遺物は無く、機能していた時期は不明である。

(浅田)

(3) 焼土遺構[SN] (図11)

2基検出した。第1号は第2号竪穴住居跡の南西側に単独で存在する。長軸61cm、短軸46cmで、梢円形にII層が焼け込んでおり、被熱厚は10cmを測る。出土遺物は無く、機能していた時期は不明である。

第2号は第6号土坑及び第1号竪穴住居跡と重複しており、本遺構より古い第6号土坑の堆積土最上層に、また新しい第1号竪穴住居跡の下層に位置する。被熱面は長軸85cm、短軸71cmの不整円形を呈しており、中央部で硬化した1層の周間に、漸移層的な2層が確認できた。最大被熱厚は20cmを測り、繰り返し直接強い被熱を受けたことを示しており、明らかに第1号とは様相が異なる。このような強い被熱痕跡は本調査区内では第2号竪穴住居跡の地床炉しかないこと、第2号の位置が第1号竪穴住居跡の2基の炉跡の軸線上に位置していること、本遺構の2層出土縄文土器が第1号竪穴住居跡出土縄文土器と遺構間接合したことから、本遺構が第1号竪穴住居跡の複式炉の一部であった可能性も検討した。ここで重要なのが第2号上部の堆積土であるが、確認調査で削平させていたため直接的な前後関係を確認できなかった。第1号竪穴住居跡の床面レベルと比較すると第2号焼土遺構の確認面は約20cmほど低く、単純に共伴を指摘することは困難な状況である。被熱層は土坑堆積土に存在しているため、堆積土の経年変化により沈み込みが生じた可能性も挙げられるが、本事例と同様に第5号土坑の堆積土上に構築した第2号竪穴住居跡の地床炉には沈み込みが確認できなかった。また、出土土器が第1号竪穴住居跡出土土器と遺構間接合している件については、2層が本来は第6号土坑の堆積土であり、第6号土坑と第1号竪穴住居跡は完全に重なり合っているため、第1号竪穴住居跡

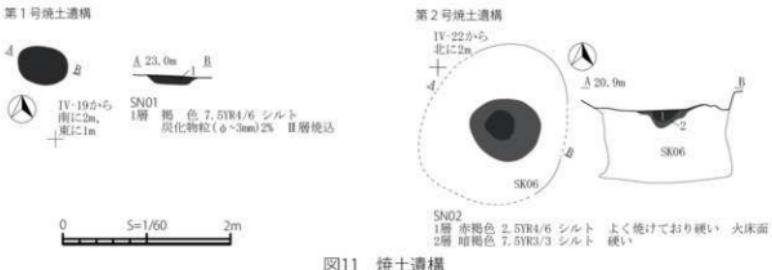


図11 焼土遺構

構築時に第6号土坑を壊した際に一部掘り上げられ、再流入した可能性も考えられる。

以上のように、明確に第1号竪穴住居跡と伴う根拠を挙げることが困難であることから、本報告では第2号焼土遺構を単独の焼土遺構として扱うこととした。

(浅田)

(4)柱穴[SP] (図12)

1基検出した。平面分布を見ると、調査区中央よりやや西側に位置している。単独で確認しており、建物に関連する可能性は低い。堆積土は3層に分層できた。3層は掘方埋土で、中央の柱穴を取り囲むように存在する浅い掘り込みを埋めている。2層は柱部分にあたると思われ、堆積土の主体を占める。明確に埋戻しを示唆する情報は得られなかつたので、自然流入土と捉えておきたい。1層は焼土を含んでいるが、確認面付近に僅かに確認できたのみであった。出土遺物は2層から縄文土器が4点、6.0g出土している。これらは流入土に伴い混入したものと捉えられる。

(浅田)

第2節 出土遺物

(1) 縄文土器 (図13~16)

調査区全体で総数654点、8940.8g出土した。この内、遺構外からの出土は500点、6403.7gである。つまり、本調査区で出土した縄文土器は大半が遺構外からの出土である。

諸特徴を基に、第I~III群に分類した。以下、この分類毎に記載する。

第I群：縄文時代前期末葉、円筒下層d式に比定される。図14-12~17の6点を図示した。

全て遺構外からの出土で、口縁部から胴部までの小破片である。器形復元可能なものは含まれていないが、いずれも深鉢になるものと思われる。胎土には横方向の纖維混入痕が観察でき、小破片でも分類識別が容易であった。破断面の観察から、色調は表面が褐色で、内面が黒色の2層に分かれる。内面調整はいずれもミガキである。

図14-12・13は口縁部で、僅かに外反する。胴部施文との境界には、図14-12は先端が鋭利な棒状工具による横方向の連続刺突、図14-13は縄側面压痕を横位に施文し、区画している。縄文地文は、口縁部はいずれも単軸絡条体を横位に施文している。胴部は図14-13・14・15が単軸絡条体を縦位に施文



図12 柱穴

している。他に図14-16は複節RLR、図14-17は器面磨滅のため詳細は不明であるが多軸絡条体の可能性がある原体で施文している。

第II群：縄文時代中期末葉、大木10式併行とされるものに比定される。図13-1～13・16～18、図14-1～4・10・11・18・19・21～25、図15-1・4～13の40点を図示した。

器種は深鉢と壺があり、1点を除き全て深鉢である。胎土は第III群と比較し、粒径の大きい砂粒の混入が多い傾向にある。器厚は厚めだが、焼成が良好で硬質感がある。成形時の特徴として、破断面の観察から粘土積み上げ時の外傾接合が顕著に観察できる。縄文施文は基本的に単節を縦方向に回転させているが、図15-9は単軸絡条体を縦方向に施文している。

全て破片での出土で、全体の器形が確認できるまで復元できたものは無い。このため部位毎に概観する。

口縁部は図13-1・3のように僅かに外反するものや、図13-4、図14-11・18・24のように肥厚するものが見られる。口唇部断面形は、図13-3・4のように平坦に面取りされ角張っているものや、図14-21の様にそのまま先細りになるものが見られる。

胴部は地文縄文の上に沈線でJ字文を施文する図15-1が代表的なもので、図13-1・16も同様の文様になると思われる。図14-25は棒状工具による刺突が施されている。図15-1は口縁内面に鱗状隆帯を作出している。

底部は編組圧痕が観察されるものが多く、いずれも「ござ目(ざる目)組み」(名久井2004)に該当するものと思われる。外底面は平坦なものが主体だが、図13-18のように中央が持ち上がり、上げ底状態になっているものもある。底部から胴部にかけては、図13-18、図14-1、図15-11～13のように、ほぼ直線的な立ち上がりを見せる。

図14-2～4は壺で、外面に赤色顔料の付着が確認できるのが特徴である。接合しなかったものの1個体分になると考えられる。図14-2は大きく外反する口縁部で、地文である縄文の上から、比較的細い棒状工具の先端を持ちいた沈線施文を行っている。図14-3は胴部で、胴部最大径部分の張り出しあはなく、本群の深鉢形の括れた器形を強調したような形になるものと思われる。図14-4は胴下半部から底部で、底部から胴部は比較的直線的に立ち上がる。

第III群：縄文時代後期初頭に位置付けられる。図13-14・15、図14-5～9・20、図15-2・3、図16-1～14の24点を図示した。

器種は1点の鉢を除き、全て深鉢である。口縁部は内湾気味に立ち上がるものが多い。口唇部断面形は第II群同様、平坦に面取りされ角張っているものが多い。胎土は第II群と比較し、砂粒の混入が少ない。器厚は明確に第II群より薄手で、焼成も良好だが、胎土の影響と思われる軟質感がある。成

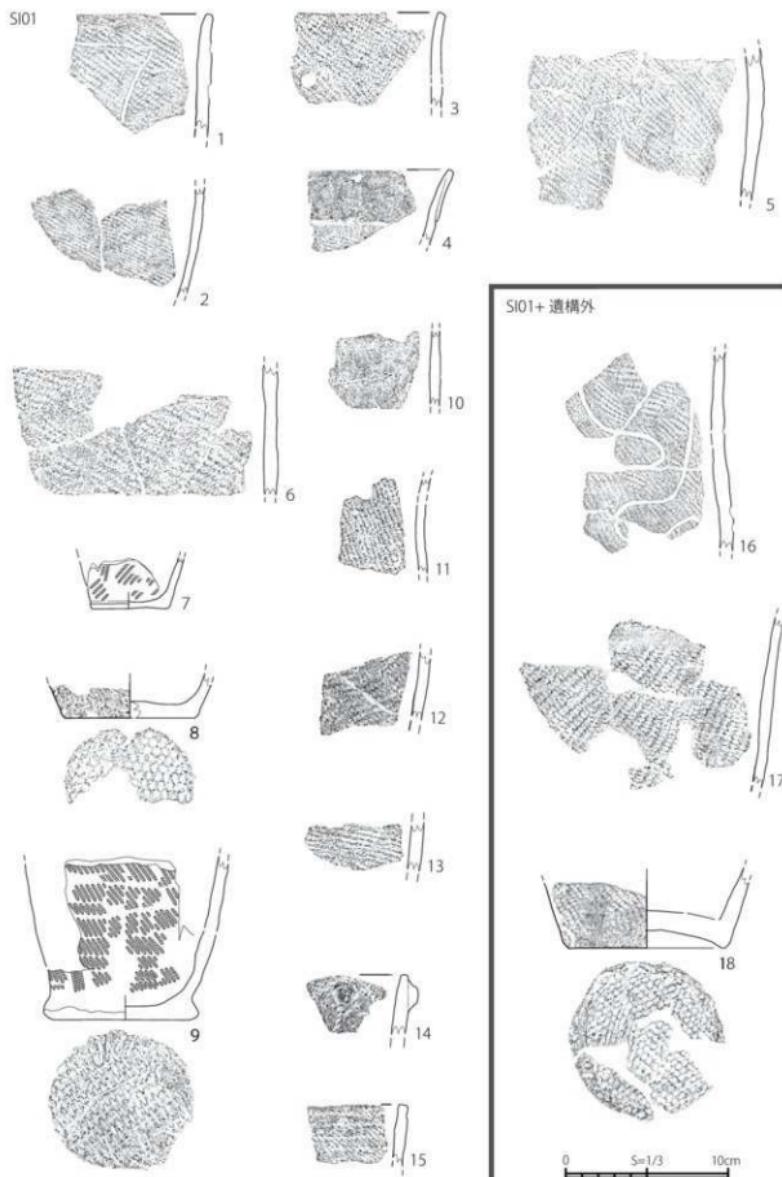
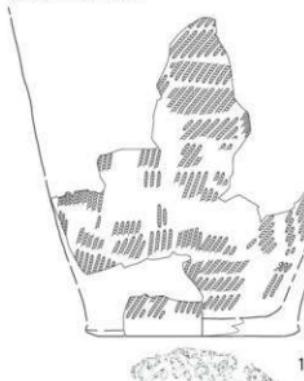
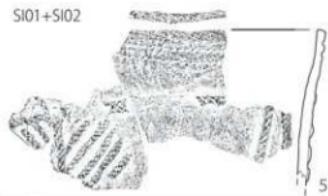


図13 繩文土器-1

遺構外 +SI01+SK01



SI01+SI02



SK01



遺構外



1

5

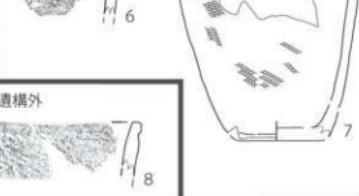
9

12

13

14

16



SI02



図14 繩文土器－2

遺構外

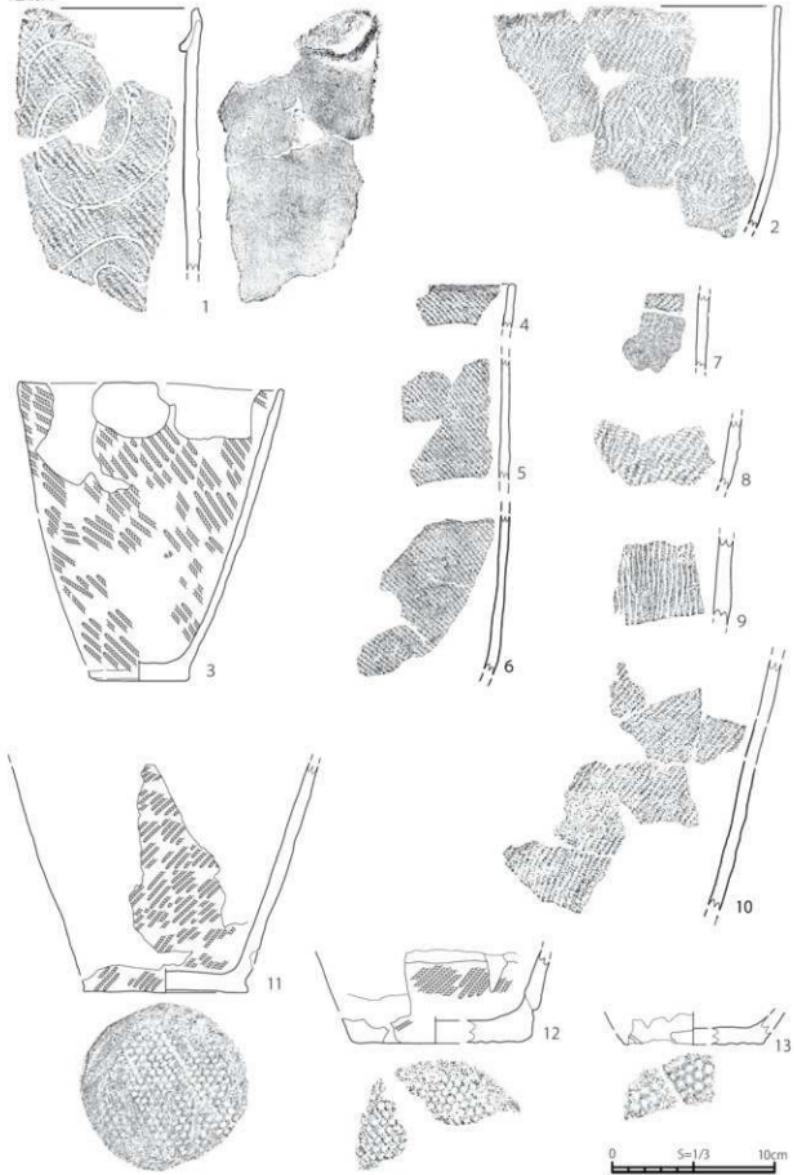


図15 繩文土器-3

遺構外

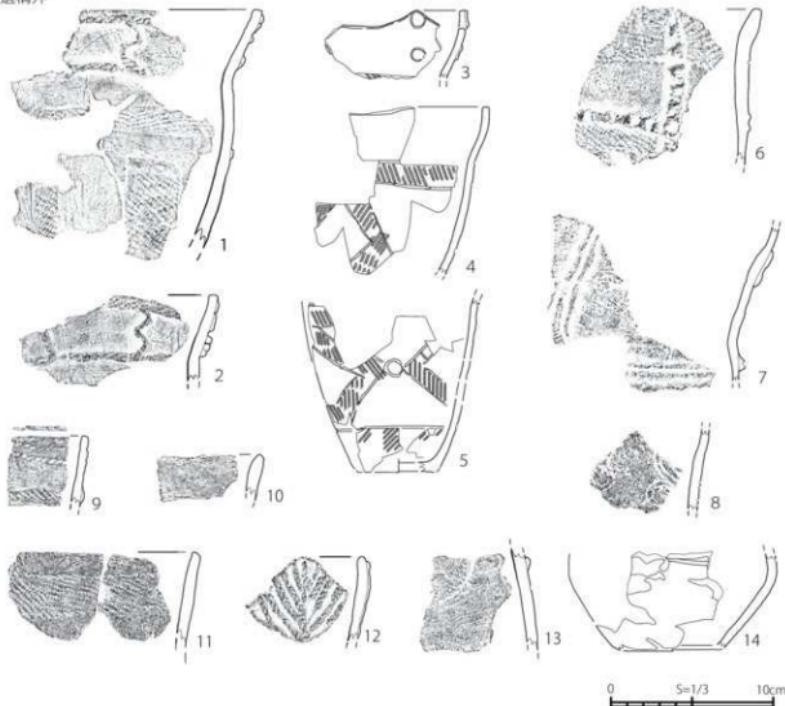


図16 繩文土器-4

形時の特徴として、第II群と同様に粘土積み上げ時の外傾接合が観察できる。全体器形を復元できた資料は図15-3のみであり、全体像を伺うことができない。内面調整は一部ヘラナデが用いられているが、大半がミガキ調整となっている。縄文施文は単節の縦方向回転に加え、斜方向や横方向回転が見られるようになっている。

第II群土器と比較し、大きく異なる特徴は以下の点である。①縄の側面圧痕による区画及び施文、②上面に爪型連続刺突を持つ隆帯貼付、③上面に沈線施文を持つ隆帯貼付、④上面に縄文施文する隆帯貼付、⑤沈線による区画内の充填縞文、⑥口縁部と胴部の境界で大きく屈曲し、口縁部が内湾する器形。以上のような特徴は八戸市牛ヶ沢(3)遺跡第III群土器(青森県1984)に見られ、共通性が高い。以下、上記の諸特徴を中心に記載する。

①縄の側面圧痕による区画及び施文は図13-14・15、図14-5・8・9、図16-6・9・11に見られる。図13-14は波状口縁の波頂部下に瘤状の円形突起が貼り付けられ、そこを起点に縄側面圧痕が垂下す

るようすに施文されている。図13-15は口縁部に横方向の縄側面圧痕が確認できるだけで4条施文される。図14-5は口唇部下に口縁と並行するような縄側面圧痕が2条、図14-8は1条施文される。図14-9は文様帶区画の意味を持ち、縄側面圧痕施文後、下部にのみ縄文施文を行っている。図16-6・9・11も図14-9と同様、文様帶区画のため横方向の施文がなされている。

②上面に爪形連続刺突や、③沈線施文を持つ隆帶貼付を行うのは図16-6・7に見られる。図16-6は①の施文後、口縁部から垂下する幅約8mmの粘土紐を貼り付け、上部から連続刺突を施している。刺突の先端は粘土紐を超えて本体にまで到達している。刺突の先端は緩やかに湾曲しており、爪形という表現を用いたが、指頭痕が見当たらず、鋭利な切れ込みを示していることから、刺突に際して指先で行っている他、ヘラ等の工具を用いている可能性がある。図16-7は口縁部から斜方向に下る隆帶と、口縁部と胴部の屈曲部に横方向の隆帶が確認できる。いずれも幅約8mmの粘土紐を貼り付けた後、上部から隆帶をなぞる様に沈線施文がなされている。この行為は施文と同時に粘土紐の押さえつけ効果もあるものと推測する。隆帶で囲まれた部分には平行する2~3条の沈線で渦巻状の文様が施文される。諸特徴が一致するため、図16-8とは同一個体と思われる。

④上面に縄文施文する隆帶貼付は、図14-5、図16-1・2・12・13に見られる。図14-5は口縁部と胴部の屈曲部に幅約5mmの粘土紐を横方向に貼り付け、胴部には縦方向の隆帶から左右対称に斜め上に伸びる隆帶を付加し綾杉状の文様になっている。八戸市董塚遺跡（県教委1984）から出土した狩猟文土器に見られる綾杉状の文様部分は斜め下に伸びる隆帶であるため、本遺跡出土のものとは上下逆になる。また牛ヶ沢(3)遺跡でも斜位の短い隆帶を綾杉状に貼り付けたものが出土している。図16-12は磨滅が進行しているが、波状口縁部の頂部と判断した。頂部から垂下する粘土紐に図14-5と同様の斜方向の粘土紐を付加している。いずれも貼付後、隆帶上面にのみ縄文施文している。図16-1・2は同一個体と考えられる。口縁部と胴部の屈曲部と口唇部下に横方向の隆帶を作出している。2本の隆帶をつなぐように蛇行する隆帶が付加される。図16-13は隆帶の残存が僅かであるため詳細は不明である。

⑤沈線による区画内の充填縄文は図16-1・3~5に見られる。上述した八戸市牛ヶ沢(3)遺跡第三群土器には縄文→沈線の磨り消しと沈線→縄文の充填が見られるが、本遺跡では後者の沈線→縄文の方が多く選択されている。図16-1は胴上部に横方向の縄文帯が、ミガキによる無文帯を挟み、胴下部には縦方向の縄文帯が見られる。図16-3~5は同一個体と考えられる。図16-3は口縁部が波状口縁を呈し、波長部直下とその下部に瘤状の円形突起が貼り付けられている。口縁部は緩やかに内湾する。図16-4は口縁部から胴部まで残存している。口縁部は無文で、口縁部と胴部の境に当たる屈曲部直下に横方向の沈線区画内に縄文を充填した文様帯が施文されている。胴部中央には瘤状の円形突起が貼り付けられている。円形突起を頂点とし、沈線区画と充填縄文による縄文帯で菱形が描かれている。胴下半部には横方向の沈線によって区画され、底部までの間は縄文施文される。

⑥口縁部と胴部の境界で大きく屈曲するものは図14-5、図16-1~4・6・7に見られる。第II群と明確に異なる点である。

一方、文様帶を持たない、地文縄文の深鉢は、第II群と共通性があるものの、上述した焼成や胎土における差異があるものや、図14-7、図15-2、図16-5のように底部から胴部にかけ、やや内湾気味に立ち上がる器形などを根拠としている。このため第II群、第III群の粗製深鉢については、諸特徴を

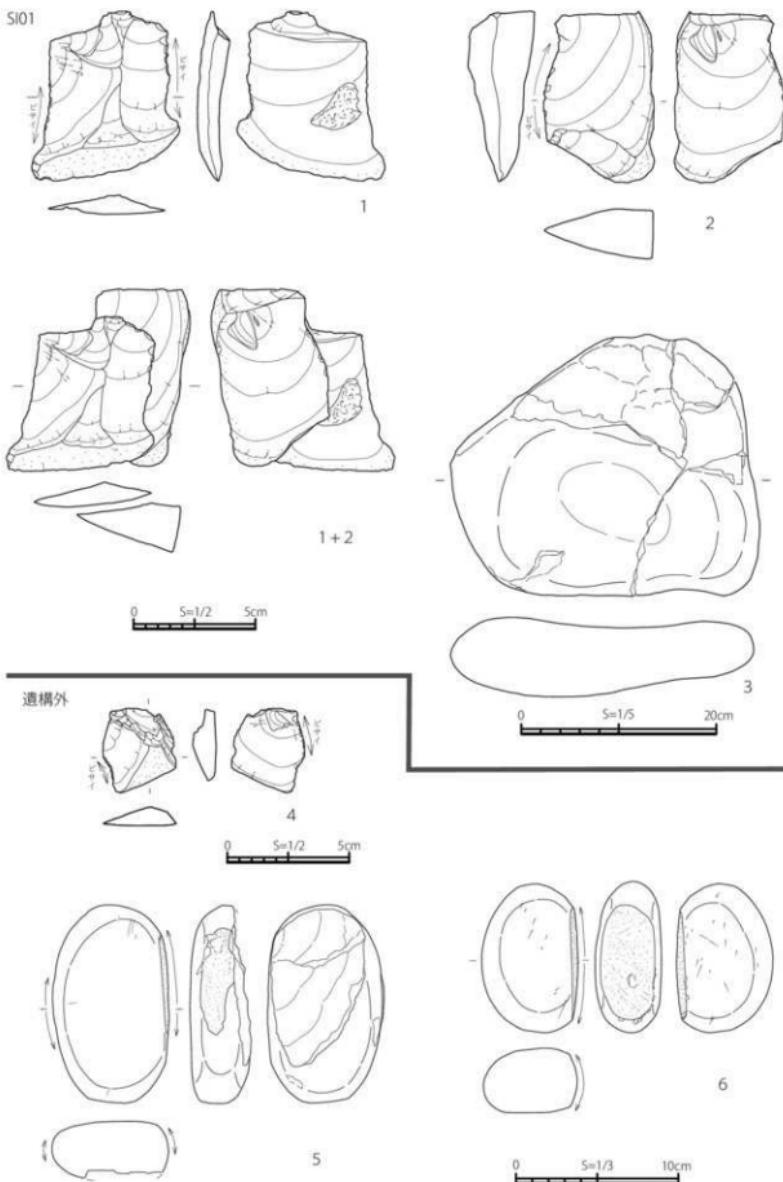


図17 石器

持ち合わせていない、また判別が困難なものが含まれており、時期分類でどちらの群にも帰属する可能性がある不明瞭なものが存在することをお断りしておきたい。

図16-14は胴下半部のみのため詳細は不明だが、鉢形を呈すると考えられる。器厚は薄く、内外面ともに丁寧なミガキ調整が施されている。底面から大きく胴部を持ち、胴最大径上部に横方向の沈線が施文されている。器形的に縄文時代後期前葉にまで下る可能性があるが、ここでは本群に含めておく。

(浅田)

(2) 石器(図17)

今回の調査で出土した石器は、Rフレイク2点、Uフレイク2点、二次加工剥片1点、剥片9点、磨石3点、石皿1点、搬入礫1点である。

図17-1～3は第1号住居跡から出土したものである。1・2とも縁辺に微細剥離痕が見られるが、1ではそれが連続しており、2のそれは不連続である。この2点の石器は接合関係にあり、同一方向から剥片が作出されたことがわかる。3は石皿で、中央付近が幾分窪んでいる。

図17-4～6は遺構外からの出土である。4はRフレイクで、微細剥離痕が連続してみられる。5・6は磨石である。5の器面は平滑で、磨面はザラついている。石材は凝灰岩である。6の器面も平滑である。磨面はやや幅が広く、滑らかな磨痕が見られる。石材は安山岩である。

(島山)

第4章 総括

第1節 遺跡の立地と検出遺構

斗南丘(5)遺跡は、田名部低地の東側に広がる標高18～23mの海成段丘上に位置する。調査区南側は土地改変に伴う削平を受けており、調査開始時は調査区が周囲より一段高まっている状況であった。調査区北側には海成段丘を開析する谷が存在し、谷底からの比高差は約15mを測る。調査区東側から北側にかけては、この谷に向かい急斜面となっている。この開析谷は北西方向に延び、田名部川の流れる田名部低地とななる。遺跡北側に位置する醸農(1)遺跡もこの谷に面しているが、本調査と同一事業に係る発掘調査を行った地点は、標高が8～13mと一段低い面に立地している。このため斗南丘(5)遺跡から醸農(1)遺跡を見ると、完全に見下ろす形になる。また調査区西側には別の開析谷の谷頭が位置しているため、調査区は三方が傾斜する地形となっている。調査区中央はやや平坦な地形となっている。調査前の土地利用状況は針葉樹の林であった。

調査の結果、堅穴住居跡2軒、土坑6基、焼土遺構2基、柱穴1基を検出した。本来の遺構検出面は基本層序第II層であるが、遺構堆積土との判別が困難であったため、基本的に第III層まで掘り下げて確認を行った。第II層で検出できたのは第2号焼土遺構のみである。

調査区中央から北東寄り、北側の開析谷に面する段丘縁辺で、堅穴住居跡を2軒検出した。堅穴住居跡同士は約6m離れている。堅穴住居跡の規模はいずれも長軸が3～4mを測り、平面形はやや歪んだ円形を呈する。床面積は10～11m²で、同時期の集落跡が検出された八戸市田代遺跡では、いずれも中規模クラスにあたる(青森県教委2011)。柱穴はいずれも検出できなかった。炉跡は第1号が石圍炉と地床炉が伴う複式炉、第2号は地床炉のみとなっている。前述した田代遺跡では縄文時代中期末葉には石围炉を含む複式炉が中心だが、後期初頭になると地床炉のみとなる変遷が確認されている。

堅穴住居跡の時期比定が可能な遺物は出土量が非常に少なく、直接遺構の時期比定を行う材料に乏しい。出土遺物の接合関係を見てみると、第2号堅穴住居跡の堆積土と第1号堅穴住居跡の確認面から出土した縄文時代後期初頭の土器が接合している(図14-5)。接合点数が少ないため可能性の域を出ないが、第2号堅穴住居跡が未だ大きく窪地状態であったのに対し、第1号堅穴住居跡では既に埋没がかなり進行していたことを窺わせる。つまり第1号堅穴住居跡の方が第2号堅穴住居跡より古い遺構である可能性が高いことになる。このような状況証拠を踏まえ、第1号堅穴住居跡は縄文時代中期末葉、第2号堅穴住居跡は縄文時代後期初頭に機能していたものと捉えておきたい。

堅穴住居跡と他遺構との重複関係は、堅穴住居跡が最も新しい遺構で、その下部にフランコ状土坑が存在するという共通項を持つ。なぜ土坑と重複する地点に構築したのか、明確な根拠は現場での調査所見からは見いだせなかった。両堅穴住居跡とも偶然古い土坑と重複する場所に構築したとすることもできるのだが、ここでは意図的にこの場所を選地した可能性について検討してみたい。意図的に土坑と重複するように堅穴住居跡を構築しようとしたならば、構築場所の選地の際、その場所に土坑があることが把握できていなければならぬはずである。このため本調査区の堅穴住居跡を構築する際に、土坑がどのような状況であったかを検証する。調査区内で検出したフランコ状土坑の埋没過程を確認すると、1基を除き自然流入による埋没過程を経ており、埋没最終段階の窪地状態から堆積土

が黒褐色土主体に変化することを確認している。壁崩落土や遺構掘り上げ土の再流入に伴う堆積土は、Ⅲ層以下のロームや砂が混入しており、黒褐色土主体の流入は遺構周辺に存在する表土との関連が強いと判断できる。つまり周辺の表土が流入する一定期間、窪地状態が継続していた可能性が挙げられる。窪地に流入する表土の堆積期間は非常に長くかかったものと考えられる。これは現在でも平安時代の堅穴住居跡が埋まり切らず、地表面から観察できる事例から推測できる。つまり土地の改変が無ければ、少なくとも1000年間は窪地状態を維持できることが証明されている。本調査区におけるプラスコ状土坑の廃絶時期がいつであったか、出土遺物が堅穴住居跡よりさらに少ない状況のため明確にはできないが、第1号土坑と第3号土坑の堆積土上層から縄文時代中期末葉と思われる土器片が出土しており、縄文時代中期末葉段階には窪地であったことを示唆するものである。以上のように堅穴住居跡構築時には土坑が埋没過程にあり、窪地としてその位置を確認することができた可能性があるといえよう。そうなると、本調査区で堅穴住居跡を構築した人々が選地する段階で埋まり切らない土坑を意図的に利用したと仮定した場合、なぜそのような選地を行ったのか、という疑問が生じる。この選択によるメリットは、既に窪地状態であるため、堅穴住居跡構築時に排出する土量が軽減できる点が挙げられる。但し、それだけの理由であれば他の遺跡でも重複構築の事例が存在するはずだが、管見の限り類例は無いため、仮に労力軽減目的で土坑上部に堅穴住居跡を構築したならば、何らかの別の選地理由も併せて存在したと見ておいた方が良いと思われる。いずれにしてもこの疑問については残念ながら明確な回答を出すことは現状ではできないため、問題提起に今後の事例増加を待つこととした。

土坑は形態等から2群に分類できた。主体を占めるのは断面形がプラスコ形の土坑である。分布を見ると、調査区北東側の斜面に面した段丘縁辺部に散在する。土坑同士の重複は無く、上述のように堅穴住居跡と重複する土坑がいずれも堅穴住居跡より古いこと、縄文時代中期末葉の土器片が堆積土上層から出土した土坑であることから、縄文時代中期末葉以前に機能していたものと推測する。本調査区から出土した縄文時代中期末葉以前の土器は、第I群とした縄文時代前期末葉の土器が存在する。詳細は後述するが、これらは出土量が少ないと、第I群の出土地点は土坑の分布状況とは重ならないことから、土坑の機能時期とは直接結びつかないものと考える。

焼土遺構は2基検出した。第1号焼土遺構は第2号堅穴住居跡の南西側に位置し、調査区中央の平坦面に位置している。出土遺物もなく、明確な用途も不明であるが、調査区内において何らの作業を行うには適した場所であるといえる。第2号焼土遺構は第1号堅穴住居跡の下、第6号土坑の堆積土上層が強く被熱した状況を検出した。平面位置は第1号堅穴住居跡の複式炉の主軸上に位置し、調査段階でも当初は堅穴住居跡の炉跡と認識していた。調査段階で判断に苦しんだ最大の理由は、被熱面が第1号堅穴住居跡の床面より低い位置で検出された点にある。このため第1号堅穴住居跡の下部にもう1軒堅穴住居跡が重複している可能性も考え調査を進めた。その結果、第1号堅穴住居跡の下部には掘方しか確認できず、被熱面の下部は土坑のみであることを確認した。このため本報告では単独の焼土遺構として報告を行った。被熱の度合いは第1号焼土遺構と明確に異なり、長期間被熱を受けたことがわかる。土坑堆積土が経年変化により沈み込んだ可能性も考えたが、炉上部の堆積土の情報が失われており、確認することができなかつた。今後周辺地域で複式炉検出事例が増加すれば、再検討可能な状況になるものと思われる。

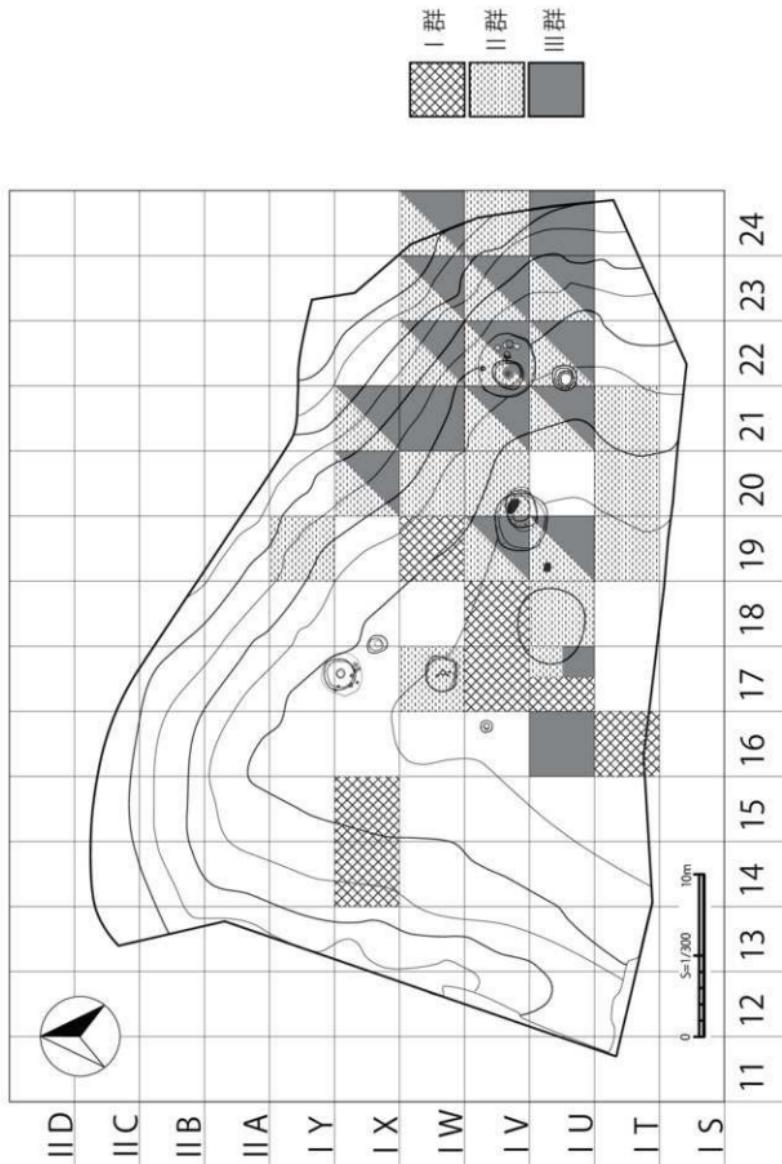


図18 繩文土器時期別分布図

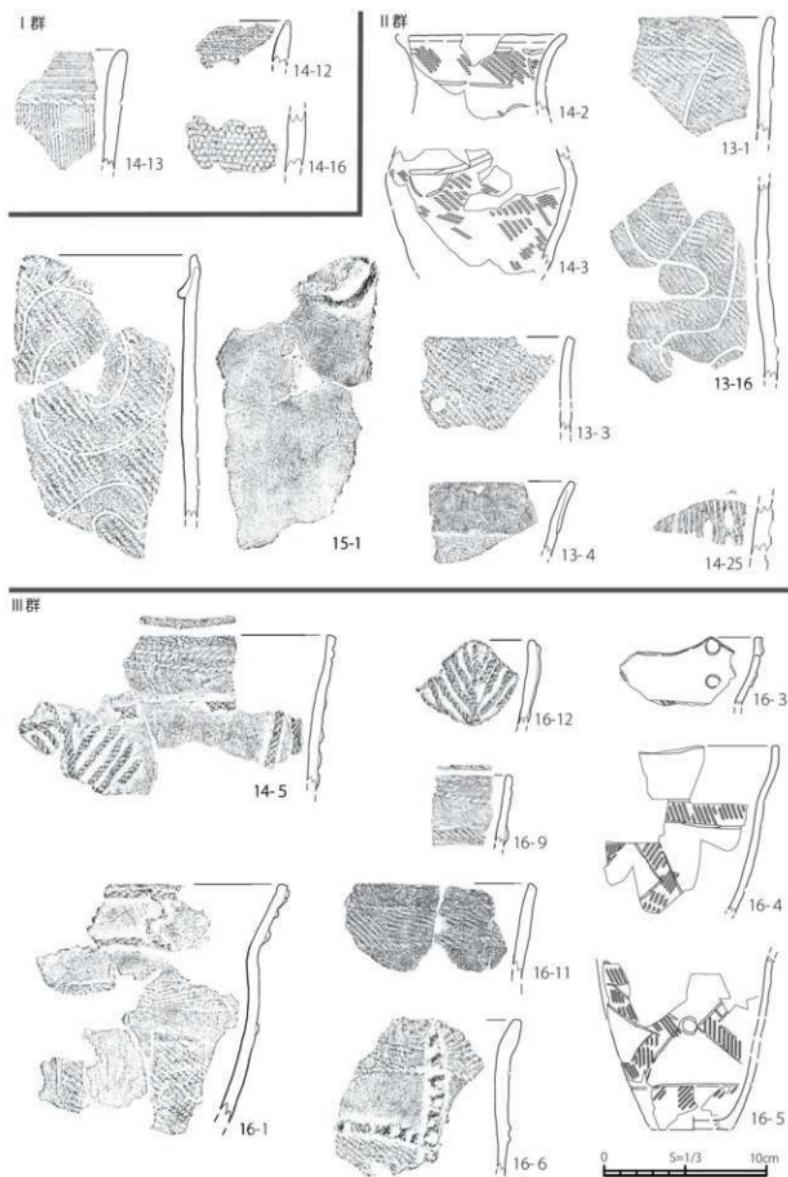


図19 繩文土器分類図

第2節 出土遺物

本調査区から出土した遺物は縄文土器と石器である。出土地点を見ると竪穴住居跡や土坑等、掘り込みの深い遺構内からの出土量は少なく、段丘縁辺に位置する竪穴住居跡から北東側斜面にかけての遺構外から多く出土する傾向が見られた。

遺構外から出土した土器がどのように分布するのかを見るため、時期別の出土地点をグリッド配置図に落としたものが図18である。出土土器は図19に示したように3つの群に分類できたが、細片も多く、全ての遺物を網羅することはできなかつたため、時期判別可能な土器で掲載している。これらの図を基に各群の分布等、諸特徴について述べる。

第I群土器は縄文時代前中期葉、円筒下層d式に比定される。出土地点を見ると、遺構に伴うものは無く、調査区中央の頂部から西側開析谷にかけて分布している。このことから、第I群土器を伴う人々の活動視点は、西側の開析谷方面を指向していたと考えられる。土坑の分布は調査区中央よりやや西に3基存在するが、この土坑周辺には第I群土器の分布が見られない。前述したように土坑の機能時期は、縄文時代中期葉以前であり、本調査区で竪穴住居跡に伴う第II群より古い時期の土器は第I群土器しかないので、土坑内から出土が見られない点からも、第I群土器と土坑との関連性は低いと推測する。このため、本調査区内における第I群土器を伴った人々の活動については不明とせざるを得ない。上道遺跡から当該時期の土器が出土していることから、本遺跡周辺に活動拠点が存在した可能性の指摘に留めておきたい。

第II群土器は縄文時代中期葉、大木10式併行と考えられる。器形は大半が深鉢形で、壺形が含まれる。深鉢形は口縁部が緩やかに外反気味に立ち上がる器形のものが多い。壺形には赤色顔料の付着が確認できる。土器胎土には砂粒が多く混入し、厚手となるものが多い。底部には編組圧痕が多く見られ、底部から胴部に向け直線的に立ち上がる器形が多い。縄文施文が縦方向であることや、沈線によるJ字文等の施文が見られ、口縁部に鱗状隆帯を作出するものがある。土器成形時の輪積痕は外傾接合を示す。以上のような諸特徴が見られる。

出土地点を見ると、第1号竪穴住居跡の堆積土と、調査区中央から第1号竪穴住居跡の北東側斜面下にかけて分布している。第1号竪穴住居跡の炉の配置は北東に偏っている。複式炉の方向から出入りしたとすると、住居から出てすぐの斜面を廃棄場所として利用していたことになる。

第III群土器は縄文時代後期初頭に位置付けられる。本群土器の類例として、八戸市牛ヶ沢(3)遺跡出土第III群土器が挙げられる(青森県教委1984)。器形は大半が深鉢で、鉢形が含まれる。深鉢形は胴部と口縁部の境で大きく外反し、口唇部に向けて緩やかに内湾する器形となる。底部から胴部にかけてはやや丸みを帯びる傾向がある。土器胎土は第II群と比べ砂粒の混入が少なく、薄手のものが多い。縄文施文は縦方向に加え横方向や斜方向が加わる。文様施文には①縄の側面圧痕による区画及び施文、②上面に爪型連続刺突を持つ隆帯貼付、③上面に沈線施文を持つ隆帯貼付、④上面に縄文施文する隆帯貼付、⑤沈線による区画内の充填縄文が用いられている。

第III群土器の分布状況は、第2号竪穴住居跡が加わる以外第II群土器と同様の分布を示している。このことから、第II群土器の第1号竪穴住居跡と同様、第2号竪穴住居跡居住者が住居周辺から北東側斜面へ廃棄行為を行っていたと捉えることができる。これは活動の中心となる竪穴住居跡周辺と、竪穴住居跡の出入口が存在したと考えられる北東側に面した斜面に向け廃棄行為が行われていた結果

と想定される。八戸市田代遺跡では縄文時代中期末葉の竪穴住居跡の堆積土上層から縄文時代後期初頭の土器が出土しており、埋没過程で窪地状態にあった縄文時代中期末葉の竪穴住居跡を廃棄場所として利用していた可能性が指摘されている。また、竪穴住居跡の時期差について前節で検討したように、第2号竪穴住居跡の堆積土と第1号竪穴住居跡の確認面出土土器が接合しており、埋没に時期差が生じていることを確認しているが、第1号竪穴住居跡から縄文時代後期初頭の土器片は出ているものの、遺構外出土量と比較すると少なく、積極的な窪地への廃棄行為を行っていた形跡は見られない。むしろ縄文時代中期末葉の土器廃棄地点と大きな差異が見られないことから縄文時代中期末葉と後期初頭の廃棄行為は似たような行動パターンであった可能性が指摘できる。

第II群土器は最花遺跡から出土しており、本遺跡が立地する海成段丘上において一定規模の展開をしていたものと思われる。一方、第III群土器は管見の限り竪穴住居跡と共に出土している事例は周辺遺跡では見られない。本遺跡北側の鶴農(1)遺跡では縄文時代中期後葉と縄文時代後期前葉を主体とする集落跡が検出されているため、本調査区の前後の時期にあたることから、今後集落の変遷を検討するうえでも貴重な資料と言えよう。

(浅田)

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1984『牛窓遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
- 青森県教育委員会 1984『牛ヶ沢(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
- 青森県教育委員会 2011『田代遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第506集
- 青森県教育委員会 2013『青森県詳細遺跡分布調査報告書 25』青森県埋蔵文化財調査報告書第536集
- 青森県教育委員会 2014『青森県詳細遺跡分布調査報告書 26』青森県埋蔵文化財調査報告書第549集
- 金子浩昌・牛沢百合子・橋善光・奈良正義 1978「最花貝塚第1次調査報告」『むつ市文化財調査報告』第4集 むつ市教育委員会
- 金子浩昌・橋善光・奈良正義 1983「最花貝塚第3次調査報告」『むつ市文化財調査報告』第9集 むつ市教育委員会
- 北田勲 2012「東北地方と近隣における編組技術の様相」『考古学ジャーナル』No.636
- (株)ニューサイエンス社
- 最花貝塚遺跡緊急発掘調査団 1981『最花貝塚北地区遺跡』
- 橋善光・奈良正義 1981「上道遺跡発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』第7集 むつ市教育委員会
- 橋善光・奈良正義 1984「最花南遺跡第2次発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』第10集 むつ市教育委員会
- 橋善光・奈良正義・星和夫 1985「最花南遺跡第1次発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』第11集 むつ市教育委員会
- 名久井文明 2004「民俗的古式技法の存在とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集 国立歴史民俗博物館
- 名久井文明 2012「総論 遺物にみる編組技術の全国的様相追究のために」
『考古学ジャーナル』No.636 (株)ニューサイエンス社
- 成田滋彦 2011「上道遺跡の再検討」『むつ市文化財調査報告書』第39集 むつ市教育委員会
- むつ市教育委員会 1986『最花貝塚発掘調査報告書(第4次)』
- 森田賢司 2013「最花南遺跡第3次調査」『むつ市文化財調査報告』第41集

観察表の表記について

遺構法量に関する数値を囲む（ ）は残存値を表す。縄文土器の計測値で口径・底径における（ ）内の数値は推定復元値を、器高における（ ）内の数値は現存値を示す。また、石器の計測値における（ ）内の数値は現存値を示す。単位は長さをcm、面積をm²、重量をgに統一している。

表2 積穴住居跡観察表

回 数 番 号	遺構 番 号	略号	位 置	横 幅 面 積	付属施設	炉形態	備 考
7	1	SI01	I U-21・22、 I V-21・22	(402) × (363) × 61 (11)	火床面：40 × 39 × 4、炉：(56) × (54) × 4	石圓炉	II層上面確認
8	2	SI02	I U-19・20、 I V-19・20	(363) × 328 × 22 (9, 4)	炉：104 × 62 × 12	地床炉	III層上面確認

表3 土坑観察表

回 数 番 号	遺構 番 号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
9	1	SK01	I U-21・22	開口部：162、 底面：118	154、 底面：106	175	III層上面確認
9	2	SK02	I X-17、 I Y-17	開口部：202、 底面：266	195、 底面：251	155	III層上面確認
9	3	SK03	I W-17	開口部：232、 底面：225	208、 底面：212	122	III層上面確認
10	4	SK04	I X-17・18	127	106	56	III層上面確認
10	5	SK05	I U-19・20、 I V-19・20	開口部：235、 底面：186	194、 底面：150	166	IV層上面確認
10	6	SK06	I V-21・22	開口部：199、 底面：175	172、 底面：151	127	SI02床面確認

表4 焼土遺構観察表

回 数 番 号	遺構 番 号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
11	1	SN01	I U-19	61	46	10	II層中確認
11	2	SN02	I V-21・22	85	71	20	SK06堆積土乾上層で確認

表5 柱穴観察表

回 数 番 号	遺構 番 号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
12	1	SP01	I V-16	(75)	(71)	27	Ⅳ層上面確認

表6 繩文土器観察表

図 番 号	出土 位置	層位	器種	部位	施文・器面調整・法量	備考	分類	整理 番号
13 1	S101	深鉢	口～胴	口：平 外：LR 縦一沈線、スヌ 内：ミガキ 器高：(7.5)			II	13
13 2	S101	深鉢	胴	外：LR 縦 内：ミガキ 器高：(6.8)			II	2
13 3	S101	確認面	深鉢	口：平 外：LR 縦 内：磨減、補修孔 器高：(5.9)	I V-22		II	7
13 4	S101	確認面	深鉢	口：平、口唇肥厚 外：LR 斜 スヌ 内：ミガキ 器高：(4.7)	I V-22		II	8
13 5	S101	堆積土 確認面 試掘 シングル	深鉢	胴	外：LR 縦 内：ミガキ 器高：(9.4)	I V-22 P-2, 3	II	3
13 6	S101	確認面	深鉢	胴	外：LR 縦 内：ミガキ 器高：(8.0)	I V-22	II	6
13 7	S101	堆積土	深鉢	胴～底	外：RL 縦 内：鋭利な傷、ナデ 底：編組痕？ 器高：(3.2) 底径：(4.7)	I V-22 P-1	II	18
13 8	S101	試掘 シングル	深鉢	底	外：二次焼熱 内：ミガキ 底：編組痕 器高：(2.8) 底径：(8.0)		II	4
13 9	S101	試掘 シングル	深鉢	胴～底	外：輪積痕、LR 縦 内：ミガキ、ナデ 底面：編組痕 器高：(10.0)		II	1
13 10	S101	試掘 シングル	深鉢	胴	外：沈線、スヌ 内：ミガキ 器高：(4.6)		II	9
13 11	S101	試掘 シングル	深鉢	胴	外：LR 縦 内：ミガキ、補修孔 器高：(5.7)		II	10
13 12	S101	堆積土 壓力	深鉢	胴	外：RL 縦 内：ミガキ 器高：(4.0)	I V-22	II	22
13 13	S101	堆積土	深鉢	胴	外：無筋 L 内：ミガキ、火ハジケ 器高：(3.0)	I V-22	II	19
13 14	S101	確認面	深鉢	口	口：波状 外：貼付突起、溝側面圧痕 LR、LR 縦 内：ミガキ 器高：(3.7)	I V-22	III	20
13 15	S101	試掘 シングル	深鉢	口	口：平 外：溝側面圧痕 LR 内：ミガキ（横） 器高：(3.8)		III	11
13 16	I V-23 I U-23	試掘 シングル	深鉢	胴	外：LR 縦、斜一沈線 内：ミガキ 器高：(12.1)		II	14
13 17	S101 I V-23 I W-23	腹方 II	深鉢	胴	外：RL 縦 内：ミガキ 器高：(10.6)	I V-22 P-6	II	23
13 18	S101 I X-20	試掘 シングル	深鉢	底	外：LR 縦 内：磨減 底：編組痕、上げ底 器高：(4.9) 底径：(9.6)		II	5
14 1	S101 S001 I Y-19 I W-19-20 I W-20 I W-22 I V-20 I V-24	確認面 5 I	深鉢	胴～底	外：RL 縦、斜 内：ミガキ、スヌ 器高：(20.1) 底径：(13.1) 底：編組痕		II	30
14 2	S101 S002	確認面 2	蓋	口	口：平 外：赤色顔料付着、LR 縦、沈線 内：ナデ 口径：(9.7) 器高：(6.2)	I V-22 P-1 (I V-22)	II	21-a
14 3	S101	確認面	蓋	胴	外：赤色顔料付着、沈線、LR 縦 内：ミガキ 器高：(7.6)	I V-22	II	21-b
14 4	S101 IV-22	試掘 シングル I	蓋	胴～底	外：LR 縦 内：ミガキ 底：赤色顔料付着、沈線 器高：(6.1) 底径：(5.3)		II	21-c
14 5	S101 S101 S002	確認面 2 I	深鉢	口～胴	口：平 外：溝側面圧痕和、粘土紐貼付、粘土紐上粗、スヌ 内：ミガキ（横） 器高：(9.5)	I V-22	III	15
14 6	S102	1	深鉢	口～胴	口：平 外：LR 縦 内：ミガキ 器高：(5.9)	I V-19	III	25
14 7	S102 S102	底面 I	深鉢	胴～底	外：LR 縦 内：ミガキ 器高：(12.9) 底径：(6.0)	I V-19	III	24
14 8	S102 I W-22	I II	深鉢	口	口：平 外：溝側面圧痕 LR、LR 縦 内：ミガキ 器高：(3.3)	I V-19	III	26
14 9	S001 5	深鉢	胴	外：溝側面圧痕 LR、LR 斜 内：ミガキ 器高：(5.3)		III	27	
14 10	S003 上	深鉢	胴	外：LR 縦 内：ミガキ 器高：(4.5)	I V-17	II	28	
14 11	S002 I	深鉢	口	口：平 口唇肥厚 外：LR 縦 内：ナデ 器高：(2.4)		II	29	
14 12	I V-17	III	深鉢	口	口：平 外：单輪路全体 I A 領 II 横一溝側刺突（锐利 な先端、串先端） 内：ミガキ 器高：(2.7)	船士鐵達	I	46
14 13	I W-19	III	深鉢	口～胴	口：平 外：口縁一单輪路全体 I 領 II 横一溝側面圧痕 LR、胴一单輪路全体 I 領 II 横 内：ミガキ 器高：(7.5)	船士鐵達	I	52
14 14	I T-16	II	深鉢	胴	外：单輪路全体第1類 L 縦 内：ミガキ、火ハジケ 器高：(6.0)	船士鐵達	I	33
14 15	I X-14	II	深鉢	胴	外：单輪路全体第1類 L 縦 内：ミガキ 器高：(6.1)	船士鐵達	I	60
14 16	I X-15	III	深鉢	胴	外：複筋 RLR 内：ミガキ 器高：(3.8)	船士鐵達	I	61
14 17	I U-17	II	深鉢	胴	外：多輪路全体？ 内：ミガキ 器高：(2.9)	器面磨滅 船士鐵達	I	37

回	番号	出土位置	層位	器種	部位	施文・器面調整・法量	備考	分類	整理番号
14	18	I E-22 I V-20	I II	深鉢	口	口：平。口唇肥厚 外：LR 線 内：ミガキ 器高：(4.3)		II	44
14	19	I W-23	I	深鉢	口	口：波状 外：ナデ 内：ナデ 器高：(4.2)		II	57
14	20	I E-23	II	深鉢	口	口：平 外：LR横 内：ミガキ 器高：(4.1)		III	40
14	21	I U-19	II	深鉢	口	口：平 外：LR横・紙、磨滅 内：ミガキ、磨滅 器高：(4.5)		II	39
14	22	I W-23	II	深鉢	口	口：平 外：LR紙、スヌ 内：ミガキ 器高：(5.0)		II	56
14	23	I V-19	II	深鉢	口	口：平 外：口唇・LR横、脚・LR線 内：磨滅 器高：(4.3)		II	47
14	24	I V-23	II	深鉢	口	口：平、外：LR横 外：口唇厚 内：ミガキ 器高：(3.6)		II	65
14	25	I V-20	III	深鉢	脚	外：余白→沈鉢。棒状工具による削刺 内：磨滅 器高：(3.3)		II	49
15	1	IV-23 IW-24 順延	II	深鉢	口～脚	口：波状 外：LR縦→沈鉢 (J字文) 内：ミガキ、磨状磨滅 器高：(4.6.1)		II	12
15	2	I U-23 I U-24	I + II	深鉢	口～脚	口：平 外：口唇厚 外：LR横、スヌ 内：ミガキ (上・横、下・縦) 器高：(3.6.6)		III	41
15	3	I E-23 IW-23 順延	II	深鉢	口～底	口：平 外：口～脚・横 横 内：ミガキ 底：ナデ 器高：(4.8.5) 底径：(6.2)		III	59
15	4	I T-19	II	深鉢	口	口：平 外：LR 線 内：ミガキ 器高：(2.7)		II	31-a
15	5	I T-19	I + II	深鉢	脚	外：輪相直、LR線 内：ミガキ 器高：(7.4)		II	31-c
15	6	I T-19	I + II	深鉢	脚	外：輪相直、LR線 内：ミガキ 器高：(9.7)		II	31-b
15	7	I X-21	II	深鉢	脚	外：LR横、沈鉢、ミガキ、スヌ 内：ミガキ 器高：(4.9)		II	63
15	8	I V-24	II	深鉢	脚	外：LR 線 内：ミガキ 器高：(4.3)		II	50
15	9	I W-20	II	深鉢	脚	外：單脚踏条体第1類 縦 内：ミガキ 器高：(5.5)		II	53
15	10	I U-18 I T-21	I II	深鉢	脚	外：RL 線 内：ミガキ 器高：(15.5)		II	34
15	11	I U-22 IP-22 順延	II	深鉢	脚～底	外：RL 線 内：ミガキ 底：幅組压痕→ナデ 器高：(13.9) 底径：(10.2)		II	45
15	12	I V-1 W-23 IW-23 順延	II	深鉢	底	外：RL 線 内：磨減 底：幅組压痕 器高：(5.8) 底径：(10.6)		II	58
15	13	I V-19	II	深鉢	底	外：幅組压痕 器高：(1.7) 底径：(8.0)		II	48
16	1	I E-17	II	深鉢	口～脚	口：平 外：LR縦→沈鉢→堆疊貼付→RL (堆疊上) 内：ミガキ、スヌ 器高：(14.3)		III	42-a
16	2	I U-16	II	深鉢	口	口：平 外：隆帯→調文、スヌ 内：ミガキ、スヌ 器高：(3.3)		III	42-b
16	3	I U-24	II	深鉢	口	口：波状 外：貼付 RL 横 内：ミガキ 器高：(4.2)		III	43-a
16	4	I U-24	II	深鉢	口～脚	口：波状 外：沈鉢、RL 縦・横 内：ミガキ 器高：(10.3)		III	43-b
16	5	I U-24	II	深鉢	脚～底	外：貼付 RL 縦・横、沈鉢、磨減 内：ミガキ 器高：(10.7) 底径：(8.5)		III	43-c
16	6	I W-21	II	深鉢	口～脚	口：平 外：調側面压痕 LR、LR 純表底、底 堆疊上爪痕連續刺突 内：ヘラナデ 器高：(9.6)		III	54
16	7	I W-22 IW-23 表採	II	深鉢	脚	口：波状 外：隆帯、沈鉢 内：ナデ 器高：(9.5)		III	55-a
16	8	I W-22	II	深鉢	脚	外：沈鉢、滴巻文 内：ナデ 器高：(5.0)		III	55-b
16	9	I V-19	I	深鉢	口	口：平 外：調側面压痕 RL、LR 純表底、底 堆疊上爪痕連續刺突 内：ナデ 器高：(3.4)		III	17
16	10	I X-21	II	深鉢	口	口：平 外：調整時の捲れ、ミガキ 内：ミガキ 器高：(2.8)		III	62
16	11	I V-23 IP-23 順延	II	深鉢	口～脚	口：平 外：調側面压痕 RL→LR 線 内：ミガキ 器高：(5.8)		III	51
16	12	I U-19	II	深鉢	口	口：波状 外：隆帯貼付→調文類、?		III	16
16	13	I E-17	I	深鉢	脚	外：沈鉢、貼付突起、RL 横？ 内：ミガキ 器高：(6.4)		III	38
16	14	I X-20	II	鉢	脚～底	ミガキ、スヌ 内：ミガキ 器高：(5.8) 底径：(6.4)		III	64

表7 石器観察表

回	番号	出土位置	層位	器種	石質	長	幅	厚	重	備考	整理番号
17	1	S101	堆積土	E7+7	珪質頁岩	6.5	5.9	0.9	69.4	回17-2と接合 左側刃に微細剝離痕	5
17	2	S101	試掘	R7+7	珪質頁岩	7.3	4.4	2.4	33.4	回17-1と接合	9
17	3	S101	床底	石 盆	燧灰岩	30.8	26.6	8.2	9,000.0	S-1 中央付近が凹む	19
17	4	I W-23	II	R7+7	珪質頁岩	3.6	2.9	1.0	9.4	右側刃に連続する微細剝離	10
17	5	I V-17	II	磨 石	燧灰岩	12.4	7.2	3.2	437.5	機能面はざらついている 器面半滑	18
17	6	I U-19	II	磨 石	安山岩	9.3	6.1	4.0	364.0	幅広の機能面 とても滑らかな器面	16



上空から見た斗南丘(5)遺跡

北西より



上空から見た斗南丘(5)遺跡 (下枠線：斗南丘(5)遺跡、上枠線：酪農(1)遺跡)

南西より



調査区遠景

東より



調査区遠景

北東より



調査区から見た酪農(1)遺跡

南より 西側沢完掘

北より



基本土層断面

南より



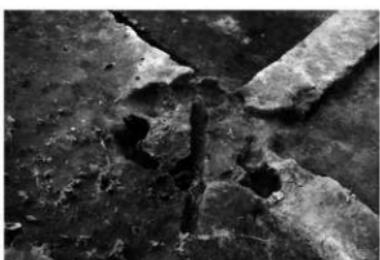
第1号竪穴住居跡 完掘

北より



第1号竪穴住居跡 炉完掘

北より



第1号竪穴住居跡 炉掘方完掘

北東より



第1号竪穴住居跡 断面

北西より



第1号竪穴住居跡 断面

南西より



第2号竪穴住居跡 完掘

北東より



第2号竪穴住居跡 完掘

北東より



第2号竪穴住居跡 炉断面

南より



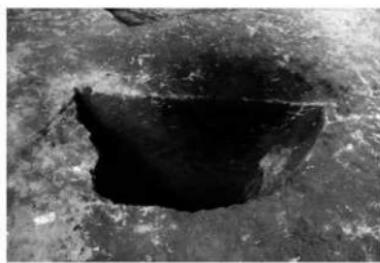
第2号竪穴住居跡 断面

南東より



第2号竪穴住居跡 断面

北東より



第1号土坑 断面



南より

東より



第2号土坑 断面

東より

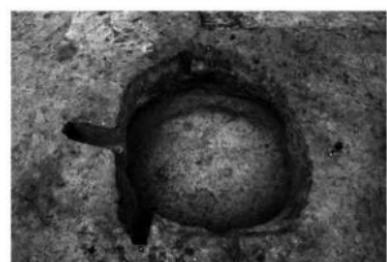


東より



第3号土坑 断面

東より



東より



第4号土坑 断面

東より



東より



第5号土坑 断面



南西より



第6号土坑・第2号焼土遺構 断面

南西より



第1号焼土遺構 確認

東より

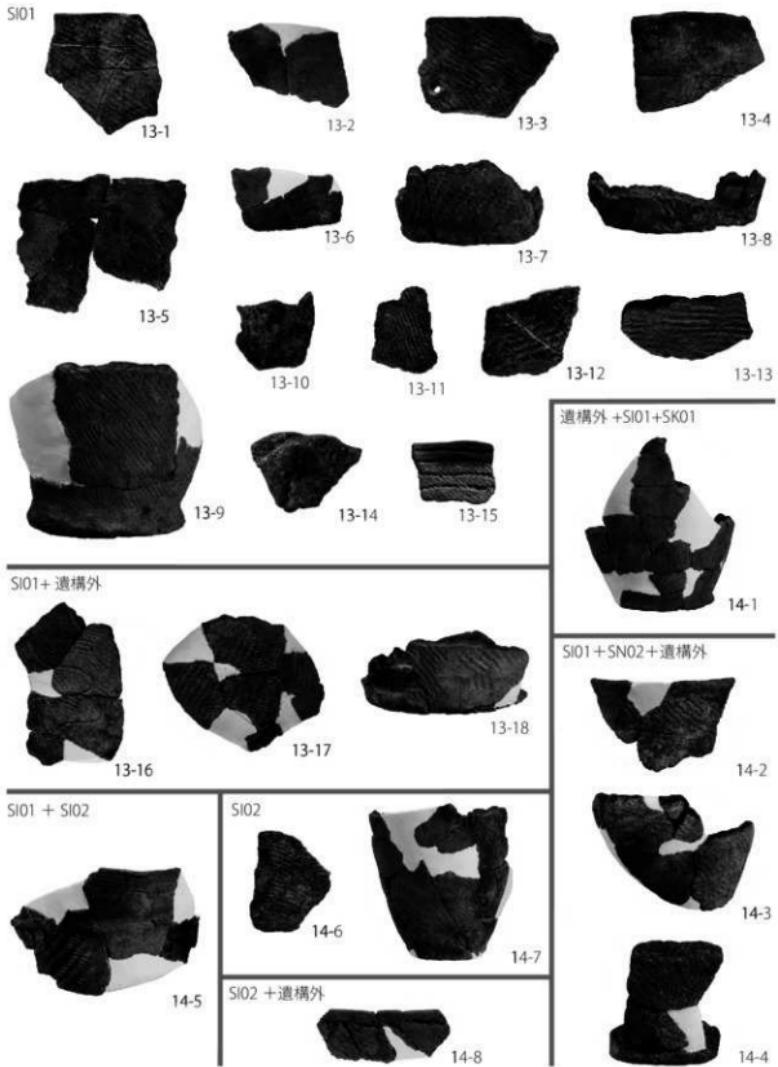


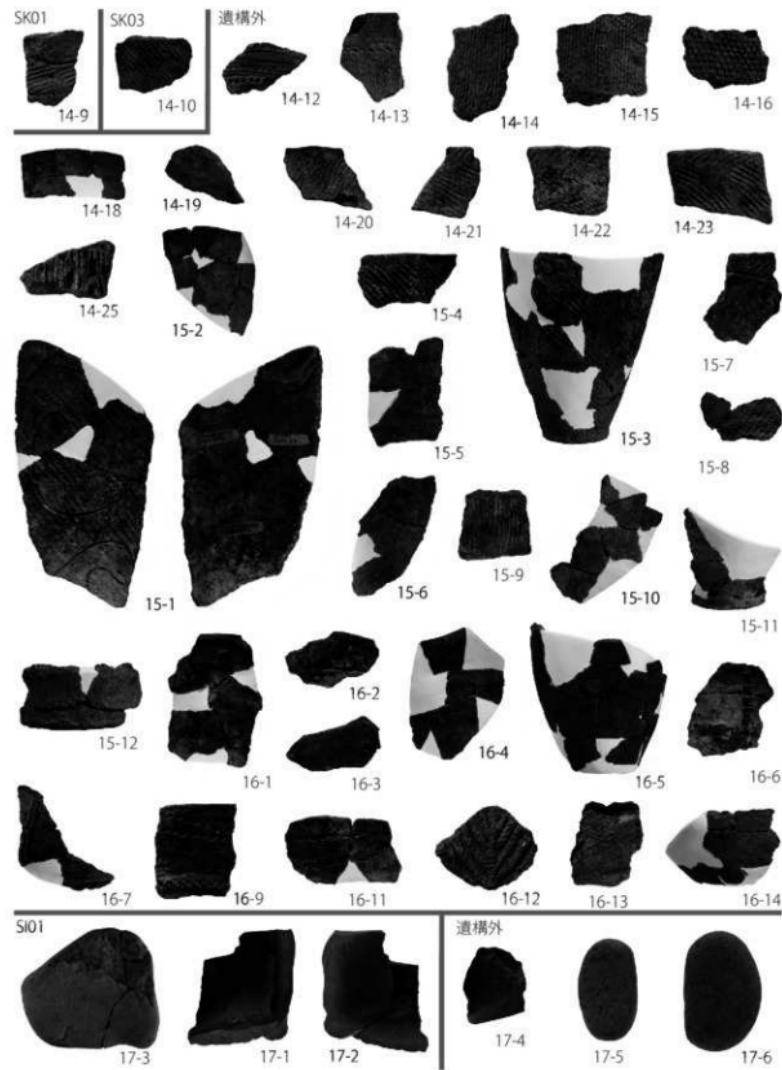
第1号柱穴 完掘

東より



南より





写真図版 8

報告書抄録

ふりがな 書名	となみがおかかっこごいせき 斗南丘(5)遺跡						
副書名	国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第555集						
編著者名	浅田智晴・畠山昇						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	2015年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
となんとうねく 斗南丘(5)遺跡	あおもりけん 青森県むつ市 大字田名部字斗南間外	02208	208182 40°31'55"	140°14'26"	20130903 ～ 20131030	1,900	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
斗南丘(5)遺跡	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡2 土坑6 焼土遺構2 柱穴1	縄文土器・石器	縄文時代中期末葉～ 後期初頭の集落跡		
要約	<p>斗南丘(5)遺跡は、田名部低地の東側に広がる標高18～23mの海成段丘上に位置する。調査区北側には海成段丘を開析する谷が存在し、比高差は約15mを測る。そのため調査区東側から北側にかけては急斜面となっている。この開析谷は北西方向に延び、田名部低地とつながる。また調査区西側には別の開析谷の谷頭が位置しており、三方が傾斜する地形となっている。南側は土地変更に伴う削平を受けていた。調査前の土地利用状況は林であった。</p> <p>調査の結果、調査区中央から北東寄り、開析谷に面する段丘縁辺で、縄文時代中期末葉と後期初頭の堅穴住居跡を検出した。堅穴住居跡同士の重複は無いが、どちらも土坑の上部に構築していた。これは埋没過程にあった埋まり切らない土坑を意図的に選地した可能性が考えられる。遺物は縄文土器と石器が出土した。遺構内からの出土は少なく、堅穴住居跡から北東側斜面にかけて多く出土する傾向が見られた。これは土器を中心とした廃棄行為が、北東側に向け行われていた結果と想定される。</p> <p>土坑はフランコ状土坑を中心に検出した。土坑同士の重複は無いが、堅穴住居跡と重複する土坑はいずれも堅穴住居跡より古いことから、縄文時代中期末葉以前に機能していたものと推測する。</p> <p>出土遺物は縄文土器と石器が出土している。縄文土器は、前期末葉、中期末葉、後期初頭の3時期に分類である。前期末葉の土器は、出土量が少ないものの、調査区中央から西側の開析谷にかけて分布している。これらの出土状況は、土坑の分布状況とは重ならないことから、土坑の機能時期とは直接結びつかないものと考える。このため前期末葉の時期は、西側の開析谷を中心に活動していたと想定する。一方、中期末葉と後期初頭の土器は、堅穴住居跡周辺や北東斜面にかけて分布しており、生活活動範囲と廃棄行為を行った範囲を示していると考える。</p> <p>縄文時代前期末葉と中期末葉の土器は周辺遺跡で出土事例があるが、後期初頭の土器は上面に縄文施文したものや刺突を加えた隆唇を貼付するもので、周辺地域では遺構に伴って出土した事例がなく、貴重な事例と言える。</p>						

青森県埋蔵文化財調査報告書 第555集

斗南丘(5)遺跡

—国道279号むつ南バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2015年3月26日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 高金印刷株式会社

〒038-0015 青森県青森市千刈二丁目1-31

TEL 017-781-2244 FAX 017-781-2509
